福祉情報誌

暮らしに役立つ、ちょっとわくわくすることがある、そんな情報を贈ります。

編集／社会福祉法人AJU自立の家
福祉情報誌発行委員会
発行／AJU車いすセンター
わだちコンピュータハウス
連絡先／〒466－0025
名古屋市昭和区下構町1-3-3
わだちコンピュータハウス内
TEL(052)841－9888
FAX(052)841－1015
E-mail: f-joho@aju-cil.com

AJU自立の家

別　冊
2014年3月11日号

テーマ

届けよう

書　高橋　誠

東日本大震災から３年。これまで「大震災と障害者」特集で取り上げた記事を、１つにまとめてみました。

特集：大震災と障害者

取り残された障害者を救え！（127号・2013/12）……2
被災した地域の人たちに支援の手を（126号・2013/10）……10
とっさの判断　迅速な避難誘導で全員が無事
　ー障がい者支援施設はまなす学園（125号・2013/8）……17
障害があっても地域で当たり前に暮らせる街にしたい
　ー石巻市で被災した新田理恵さん（124号・2013/6）……24
過酷な"被難"生活を生き抜いた全盲のスーパーおばあちゃん（123号・2013/4）……28
地域のつながりがあればこそ（117号・2012/4）……35
大震災と障害者の被災体験（112号・2011/6）……41
北海道べてるの家に学ぶ地域防災（109号・2010/12）……44

年６回発行（偶数月20日）　年間購読料1500円（送料込）
お申し込みは　http://fjoho.cart.fc2.com/

取り残された障害者を救え！

南相馬市の障害者の実態と支援の実際に学ぶ

東日本大震災の直後、南相馬市では、多くの障害者や要介護の高齢者が避難できずに取り残されました。

東北３県 127 の市町村の中では唯一、南相馬市では市役所が名簿を開示して避難したくても避難できない障害者の実態把握と個別支援を展開しました。取り残された障害者の実態と支援の実際はどうだったのでしょうか。

11 月 22 日、大阪で開かれた被災障害者報告会で報告された青田由幸さんからの話しを紹介させて頂きます。

（一部、２年前の報告会のエピソードを引用して再構成しました）

青田由幸（あおたよしゆき）
1954 年福島県南相馬市生まれ。2008 年「NPO 法人さぽーとセンターぴあ」を立ち上げ、「断らない」を合言葉に障害者の生活介護、就労支援事業に取り組む。東日本大震災では原発事故後に避難出来なかった障害者の支援や調査を行った。

つらい思いをくり返してほしくない

私が住んでいるのは、原発から最も近い南相馬市です。20km 以内の避難指示区域、20～30km の屋内待避区域、30km から外という３つの地域に分かれていて、20km 以内は人が住めません。私たちのところは原発から 24km なので、人が住んでいるところでは原発から最も近いところです。

東北の震災がだんだん忘れられてきていると思います。これから来るであろう震災、災害のことも忘れかけています。もしもの時、みなさんが自分の命を守れないのではと心配です。

私たちは大変なところをくぐり抜けてきました。これからもいろんな災害が来るかもしれない。最近も伊豆大島で台風 26 号の災害があった。阪神淡路からもまだ 18 年しか経っていない。その時に、みなさんには私たちが体験してきたつらい思いをしてほしくない。ここで話すことは、これからの想定として聞いてほしいんです。こういうことがあるよということです。

福島第一原発と南相馬市

ソフト面の対策に力を入れるべき

今日（11 月 22 日）の国会で南海トラフ巨大地震特別措置法が成立し、巨大防潮堤を作るという予算が国会で通りました。よかったと思うかも知れませんが、よくよく考えると本当にそれでいいのかと思います。今日シンポジウムで話してくれた岩手の人たちのところには、すごい防潮堤がありました。あっても多くの人が亡くなったんです。世界最大級の物があっても亡くなったのはなぜかを検証しないとダメだと思うんです。

なぜか。「これだけ大きい防潮堤があるから大丈夫だ」という安心感があった。そのために逃げなかった人がいるんですね。そんなに設備がないところは、「危ない」と感じて本気で逃げた。これからハード面を整備したとしても、どれくらいの災害が来るのかは分からない。その防潮堤で津波が止まればいいですよ。それを越える物が来た時は「大丈夫だ」と安心した人がまた命を落とすということです。

ハード面にお金をかけるだけでいいのでしょうか。もっとソフト面に力を入れないとダメじゃないかということです。東北の震災からの教訓です。

まずは自助と共助

先ほど東北のパネラーの話に、「自助」「共助」というのが出てきました。自分たちで命を守らな

いといけないよと言っていましたね。隣近所で助け合って逃げなきゃいけないよって。

実は震災前から抱えていた問題が、震災によって表に出てきました。もともと弱かったところがあって、震災によってそういうところは助からなかったんです。震災で亡くなった人の６割は、高齢者と障害者です。６割ですよ。私たちもその対象に入ってくるということです。

健常者はその地域でどう携わったのか。助けに来た人も亡くなりました。とどまった人も亡くなりました。みなさんのところは大丈夫ですか。

実際に大災害が来た時、東北の教訓がみなさんのところで活かされるでしょうか。大災害が起きて、家屋が倒れ、ライフラインが止まり、避難できないということになった時に、みなさんのところには誰が助けに来てくれますか。

ここには福祉サービス事業所の人がたくさんいますよね。当事者のもとに行けますか。災害というのは、例えば自分や自分の家族も被災するんです。当事者だけでなくて、その地域の人すべてが被災者になるんですよ。自分の家族を放っといて事業所に駆けつけられますか。家族以外でも、隣のおじいさんが下敷きになっているのを見たら助けないといけないじゃないですか。目の前の人を助けますよね。「事業所の仲間が助けに来てくれるだろう」っていうのは分からないですよ。自分が当事者のもとに行けるのかってのも分かんないですよ。

いざという時、自分はどうするのか。人が来るまで待っているのか。１日で済めばいいですよ。それが３日、４日、５日…とかかるかもしれません。

病院も駆け込めません。中小の病院はライフラインが３日くらいしかもちません。非常電源はもっていても３日分くらいの燃料タンクしかないんです。大きな大学病院なら、地下タンクで１ヶ月くらいもつかもしれませんが、南相馬市の市民病院でも３日間でした。

南相馬市の入院入所者は 1600 人でした。その人たちをどうやって避難させたか。バスですよ。自衛隊のトラックですよ。寝たきりの人たちは起こしただけでリスクは 50%高くなります。その人たちを、お姫様だっこして、車に乗せて、毛布とシートベルトでぐるぐる巻きにして、7～8 時間移動させました。大勢の人が亡くなりました。

2013/11/22 被災障害者報告会

❖ 双葉病院の場合、3月 12～16 日に避難した際、長距離の移動中や避難先で十分な治療を受けられないなどの負担がかかり、寝たきり患者 40 人、隣の老人保健施設入所者 10 人の計 50 人が死亡した。

津波で亡くならなくても、震災関連死で亡くなる人が多かった。双葉郡では関連死が直接死の２倍です。南相馬市では直接死が 636 人でしたが、避難の途中で亡くなるなどの関連死が 437 人です。これは家族が申請した人だけです。申請を出さない人が実は多いんです。まだ避難している人はいるから、もっと増えるかも知れない。震災関連死や広域避難の対策について、国はまだできていません。

そういう状況に自分が置かれた時にどうするのか。このことを本当に考えてほしいんです。

要援護者情報を出してほしい！

障害者の中で、福祉サービスや何らかの団体につながっているのは３割にすぎませんでした。残りの７割は何もつながっていない障害者です。災害が起きた時、何らかとつながっていると、安否確認をします。状況を確認して支援します。なんとかＯＫになるんです。でも７割の人は、どこで何をしているのか分からないんです。

2005 年３月、災害時要援護者避難支援ガイドラインができて、要援護者リストを作ろうということになりました。みなさんのところも、市町村にどのようなものがあるのか是非確認してみてください。

発災後、私たちは育成会など当事者・家族会と

連絡を取り合いました。市内に残った事業所が私たちだけだったので、「もし市内に残っている人がいるなら支援を続けたい」と団体の長に連絡を入れたんです。ところが、避難する時に、着の身着のまま逃げていて、誰がどこにいるのか分からない。福祉会の人たちは高齢者が多く、入院していてどこにいるのか分からない。南相馬市に取り残された人の安否は確認できない状況でした。

南相馬市内に残された障害者は過酷な状況に置かれていました。市役所に出向き何とかしなければと相談したんですが、要援護者リストは個人情報だから見せられないと言われました。

南相馬市役所

市が安否確認できないというならうちがやるしかないので「見せてくれ」とお願いしました。市は「自衛隊の空挺部隊が1200人で要援護者リストを元にローラー作戦をしているから心配するな」と言ったのです。

ところがその頃、郡山の被災地障がい者支援センターふくしまには、南相馬市の障害者から続々とヘルプが上がってきていました。日頃支援していて市内に残っている7名ほどの人は誰もが「自衛隊は来ていない」と言っている。「自衛隊はどこを訪ねたのか、リストを見せてくれ」「もし亡くなるような人が出たら市役所の責任だよ」と訴えました。それはまずいということになり、とうとう市役所から要援護者リストが出てきました。支援してきた人たちをすりあわせたところ、やはり7人とも載っていませんでした。

要援護者リストというのは、ベッドから降りられないなど、高齢者・障害者の中でも介護度の高い人が中心でした。だけど、その人たちが危険かというと必ずしもそうではない。寝たきりの老人でも息子世帯、孫世帯に元気な人がいれば、その人はみんな連れて逃げることができたのです。

逆に、リストに載らない軽度の人が取り残されていました。発達障害の娘2人を抱えてご自身も頸椎の障害のあるシングルマザーの家族がいました。彼らは、障害が軽いからリストに載らない。一家は集団避難ができず、避難所にも行けない。発達障害が2人もいたら絶対に逃げれないですよ。自宅にとどまり食料が底をついて困っていたんです。

要援護者リストでは役に立たないことが分かった。だから、障害者手帳情報を出してくれと市役所に迫りました。市役所は無理と言った。障害者手帳のある人の中には、自分の障害を知られたくない人がいる。訪ねたら「どこから知った？」とクレームが出るというのです。

でも現実に孤立して死にそうな人がいる。最後は健康福祉部長と市長の英断で、個人情報保護条例もぎりぎりパスして出してもらいました。

出してもらったはいいが、福祉事業所で市内にとどまったのはうちの事業所だけ。スタッフは3人しか残っていませんでした。

私たちも逃げたかったんです。原発の爆発が続いていて1、2、4号機が爆発して、3号機もプラプラしていて建屋が壊れたらプルトニウムが出るという状況。5～7号機も温度が上昇して、東電もコントロールできないという状況でした。

何回も逃げようと考えました。でも逃げれなかった。なぜか。仲間が目の前にいるんですよ。毎日毎日ヘルプが上がってくるんです。仙台の CIL たすけっとも、郡山の支援センターふくしまも、自ら被災しながら障害者のために動いていました。逃げるわけにいかなかった。

でも人がいなかった。そんな時、JDF 被災地障がい者支援センターふくしまから「人を出せるよ」と言われました。

個人情報を出すために

個人情報をどう出すかについては市役所と再三協議を重ねました。内閣府の災害時要援護者避難支援ガイドラインに、緊急時には個人情報を出してよいという文言を見つけました。内閣府は緊急

時に障害者の支援をしなさいと言っている。個人の生命、財産が危ない時は、本人の同意なしに個人情報を出してよいと書いてあったのです。

情報を出さないのはどこか。市町村です。市町村が出さないのです。

南相馬市の個人情報保護条例にも緊急時は出してよいと書いてあった。それでも出せないのかと迫りました。

審議会にかける必要があったのですが、委員全員が県外避難していて開催の見通しは立ちません。だから市長の専決事項として認めてもらいました。

名簿の開示を受けて

名簿の開示を受けて 65 歳以下の身体と知的障害者 1200 名のところにローラーをかけました。65 歳以上については自衛隊のローラーの時に、要援護者リスト＋アルファを対象に、自衛隊と高齢部局で歩いていました。精神は手帳だけでは、うつや引きこもりの人たちが漏れる。自立支援医療の情報を出してもらうしかなかったが、県の管轄なのでさらにハードルが高かった。市長へ直談判し、「自分たちの目の前で県知事に電話要請してくれ」とお願いしました。市長はその場で電話してくれ、不在の知事の代わりに副知事から了解を取り付け、精神の名簿も出してもらえることになりました。

精神障害者のもとには、県と市の保健師と長崎医大のチーム、自衛隊が入った。こうして、南相馬市では身体、知的、精神、高齢者のすべて回ることになったのです。

一人も漏らさない！

調査の結果、３割の人が逃げられないことが分かりました。その半分は「要支援」の状態でした。障害の重さではない、家庭の問題なんですね。どういう家庭状況かで支援の必要性が決まるんです。

当初４割の人は情報がとれませんでした。海岸のところは家がないんです。道もないんです。調査チームは、家が元あったところに行方不明の家族を探しに来るのを狙って、５月の連休や土日、お盆の時期に浸水地域を再三訪ねました。最終的には残りの４割も全て安否確認することができました。

なぜか。１人も漏らさないという思いです。漏れた人は亡くなるかも知れない。孤立しているかも知れない。活動してくれた人は『１人も漏らしたくない』という思いで活動してくれました。

おそらく今回の震災で南相馬市が日本で一番障害者とつながったと思います。けれど決して自分たちだけでできたわけではない。

また南相馬市だけよかったという話でもない。私がなぜここに来ているのかというと、日本のどこで大災害が起こるのか分からない。南相馬市でこんなふうにできたんだ、障害者全員につながったということ。ぜひみなさんの市町でも出してくれという声を出してほしい。

南相馬市はＪＤＦ（日本障害フォーラム）を通して全国から実人数８００ 人もの調査員、その後の事業所支援を合わせると延べ3000人もの応援をもらいました。彼らにも同じ話を必ずします。

自分の市町が要援護者リストに関してどういう取り決めになっているのか、調べて声をあげてほしいんです。

これから先どういう災害が起こるか分からない。けれど大災害があれば同じことが起きます。要援護者の対策ができていないからです。要援護者の所在は分かっていないより分かっていた方がよい。ローラー作戦をかけられるに越したことはない。命が助かるんです。ですから、みなさんのところで、要援護者リストがどうなっているのか、そして、自分が緊急の時にどこかにつながっていくのかどうか。確認して欲しいと思います。

名簿の開示については南相馬市役所内で異論や軋轢も生んだようです。安否確認調査の結果として、市民からのクレームはなく、「私たちは見捨てられていなかった」とむしろ感謝されたそうです。

「シャイで我慢強い」という東北人気質ではすまされない

東北は小さな街なので、コミュニティがしっかりしているところが多いんですね。原発で避難する際も、みなさん声をかけて逃げているんです。「私ら今から逃げるけれど、あんたも一緒にいくかい」と。

だけど避難所は大変です。例えば、全盲の夫婦だと周りが全く分からないという心配があって、そこで出てくる言葉が「みなさんに迷惑をかけるから」ということです。

地域コミュニティがしっかりしているところは、周囲に迷惑をかけないように生活していくという暗黙のルールがあります。だから「みんなに迷惑をかけるから」と声を出せないんです。

知的や自閉の人たちも避難所でみんなと一緒にいられないと分かるから、家に残ったのです。「東北人はシャイ」と言われます。確かにシャイなことではあるんですが、時と場合によっては命に関わることなのです。

南相馬市の避難所では、24 時間車いすに乗ったまま、同じ姿勢で２週間いたという女性がいました。避難所の周りの人は車いすに乗った人がいることは当然知っていました。でも本人がヘルプを出さないんです。「みんなも大変だから」「周りに迷惑をかけるから」とじっとしているしかなかったんです。

介助しているのは 82 歳の母親でした。トイレも大変です。みんなが寝静まってから夜中に、そーっと３～４回行くんです。その母親にも迷惑をかけたくないと水分を控えて脱水症状になるんです。トイレを我慢して膀胱炎になる。難病を抱えていたが薬が切れる心配から３日に１回に間引いて飲んでいたんです。当然体調悪くなりますよね。でもヘルプの声をあげていないから大丈夫だよねとなる。たまたま巡回の医師が見つけて、支援センターふくしまにつながった。本来なら市役所にあげるところ、役所が対応できないことから支援センターにつながったわけです。

南相馬市原町区の避難所（石神第一小学校）

知的のおとなしい人も同じでした。車いすの人は目立つからまだ分かるが、知的の人はおとなしくしていたら気づかず、漏れます。同じ避難所には知的の人が５名いたんです。誰も手を挙げられず、風呂に入れず１ヶ月近く着替えもしていなかった。やはり母親たちが「迷惑をかけるから」とじっとしていたんですね。そういう人は訪ねて調べないと分からない。外から見ただけでは見つからないんです。「迷惑をかけるから」とシャイなんだけれど、でも命に関わる。支援する側がどうやって見つけていくかという課題でもあります。

避難所は安心して避難できる場所になっているか

みなさんは避難所に行けますか。ほとんどの障害者は避難所に行っていないんですよ。「消えた障害者」と言われましたよね。最初から無理と分かるから避難しないんです。

近くの小中学校はバリアフリーになっていない、電気もガスも通っていない、毛布１枚渡されるだけ。そんなところに行ってどうするのという話です。自分の家が何とか残っていれば、まだ自宅の方がいいやとなるわけです。でも避難所に行かないと支援の手が届かなくて孤立するんです。在宅で孤立する人が多かった。

避難所が行ける場所なら避難所に逃げますよね。避難所がバリアフリーでなかったらバリアフリーにする。バリアフリーでなくても人の手が借りれたら借りる。避難所を開設する時、ほとんどは体育館です。教室をオープンにしていません。一部では教室をオープンにした。そういうところは個室管理できるからよかった。知的や精神、発達障害の人は大勢の中で不安定になったり、声を上げ

るから避難所に行かなかった。教室を開放してもらえたら、彼らの居場所を確保できるんですね。

行政は避難所を管理運営する立場から、避難所を体育館にまとめたがる。手が足りないからそうなるが、そうであれば避難所の運営を地域の人たちに任せられればよい。避難する方も、顔の見える関係の中に避難できた方が安心ですよね。一般避難所をみんなが安心して避難できる場所として、管理運営できる方法を考えないといけないと思います。

福祉避難所の課題

福祉避難所があれば、そこに駆け込めばいいと思うかも知れませんが、そんなにパイをとっていませんよ。福祉避難所は家族も一緒に避難してもよいから、20 人定員のところに 4 人家族が避難すれば 5 家族しか入れません。

福祉避難所は一般避難所に避難した人で困難な人を移動させることになっています。直接福祉避難所に行くということは想定していません。一般避難所に避難してから、この人は大変だから福祉避難所へという順番です。一般避難所に行かなければ福祉避難所につながりません。そういう課題もあり、まだ変わっていません。

震災後、いろいろなガイドラインの見直しがありました。災害対策基本法の改正もありました。でも福祉避難所の流れは変わっていません。

障害者や高齢者の施設には、「福祉避難所になれるところは手を挙げて下さい」と言われていますよね。手を挙げると大変なことになります。仙台の施設でギブアップしたところがあります。特別養護老人ホームでした。そこに駆け込んだ人たちがいた。震災によってスタッフが半減。入所者は減らない。そこに福祉避難所への避難者が駆け込む。半分のスタッフで 1.5 倍の人を見ないといけなくなるんです。みなさんのところ、福祉避難所に手を挙げて大丈夫ですか。

デイサービスで福祉避難所になったところがありました。デイだから大丈夫かというとそうではない。ここもパンクです。

協定では２週間開設する約束でした。実際には１ヶ月にも２ヶ月にも及びました。福祉避難所の人たちは行くところがないから、追い出すことができないのです。外の人たちを踏ん張って受け入れることによって、本来支援しないといけない自分たちの仲間、利用者たちを受け入れることができないんです。

だから福祉避難所の問題は本当は解決していないのです。こういう問題は、災害が起きる前から、当事者の人たちが声を上げていって、こういう時はどうするんだと訴えないと先につながらないと思います。

本当に復興しているのか

「福島は特別だ」とよく言われます。だけど被災地はみな同じです。復興していないというのは同じです。高台移転は進んでいません。仮設住宅が空いてきたといっても、遠くに移住せざるを得なくなっているんです。街がぼろぼろになってきています。

2013/11/22 被災障害者報告会
（東北⇒関西ポジティブ生活文化交流祭）

よくテレビ番組で復興商店街が取り上げられます。テレビで言うように本当に復興してきているのでしょうか。そうではない。大型スーパーがそばにできれば、客足がそちらに奪われる。復興商店街もだんだん大変なことになってきています。

復興といっても本当は先が見えていない。でも遠くから見ると何となく元気に見えるから、「東北は復興しているよね」と思われる。テレビ局が来たら「私たち大変です」「もうダメです」なんて言えないじゃないですか。

福島にはさらに重しがどかっと全体にのしかかった。放射能です。降ったものはなくならない。なくすには除染しかない。だけど除染したものは

もっていくところがなくて、自分の庭先に置くんです。放射能って集めると高くなるんですよ。

３マイクロシーベルトのところを集めて袋に入れると、１ミリとか２ミリシーベルトになるんです〔ミリシーベルトはマイクロシーベルトの千倍〕。集めて目の前に置かれて「除染が進んだ」といわれる。国は年間線量１ミリまで除染すると言いました。それが最近になって急に 20 ミリまで大丈夫と言い出した。今まで１ミリまでしかだめと言っていたのが、なぜ 20 ミリまでセーフになるの？　放射能爆発が起きた時「ただちに影響がない」と言ったのと同じ気安めです。

福祉サービスは限界に

でもそこに住み続けなければならない人がいる。特に高齢者、障害者はさらに過酷になっています。

今まで福祉サービスがそれなりにあった。ところが今回の震災で福祉サービスが飛んでしまいました。小さいお子さんがいる家庭は、影響がないようにと少しでも遠くに避難しました。福祉サービスを担っている世代が避難して戻ってこないのです。でも高齢者、障害者はほとんどが戻ってきている。戻ってきた人の 50%が重度化している。要介護区分３の人が４に、４の人が５に上がった。障害程度区分も重くなって戻ってきました。

でも担い手の人は６割に減少。４割いなくなった。さらに、介護認定の人たちの申請が増えてきている。３割増えて、130%の人たちを 60%の人たちでみる。しかも重度化している。

結果どうなったか。２年８ヶ月経った今、担い手がどんどん辞めています。現場でトップクラスの人たちが限界に来ていて、「もう無理」と辞めています。代わりの人たちがいない。南相馬市は、介護サービスの担い手不足を補うために、市役所が無料のヘルパー講習を開講しました。１年半ずっとやってきて、多くの人が受講しました。ところが現場に入ったのはたったの３名。大手のニチイ学館も南相馬市から居宅事業からの撤退をとうとう考えています。これが被災地の現状です。

南相馬市にある福祉施設「ぴーなっつ」

これは福島に限りません。岩手も宮城も同じです。災害が起きるとそういうことが起こる。

こういうことは次にみなさんのところに降りかかるんです。災害が起きてから、みなさんどこまでふんばれますか。無理なことは無理なんです。発災後に何が起こるのか、震災前に私たちの話からくみ取って欲しい。このことで自分たちの事業所はどうするのか。

安否確認できる仕組みづくりを

あらためて、安否確認は誰がどうやっていくのでしょうか。基本的に誰が行くなんて決められないんです。施設長が「俺が行く！」と決めてあっても、建物の下敷きになって死んでいるかも知れない。誰でも行ける仕組みを今から作っておかないとダメです。

民生委員や地域の人たちが安否確認をすることが言われます。でも実際にはできなかった。１つには安否確認するための名簿がないということ、それから、名簿があっても実際に開示する制度がないということが相当大きかったんです。東北の被災地で情報開示したのは２つしかないんです。１つは南相馬市、もう１つは岩手県です。岩手県では、県が視覚障害者の団体に開示した。この２つだけです。

被災地には全国から多くの支援者が入ってきました。被災地だけでは無理だろうから、外からの人たちが「安否確認しますよ」と入ってきた。でも名簿は出なかったんです。

みなさんの地域でも大災害になった時、要援護者名簿があっても開示してもらえなかったら、支援にはつながらないということです。みなさん、大丈夫ですか。

今年６月災害対策基本法の改正で、はっきり決まりました。要援護者名簿は必ず作らなければならないんです。災害時には、本人の同意なしに開示してよいということに決まった。決まったんですよ。でも行政がどこまで知っているか。「分からない」といわれたらそれまでです。法律で決まったということは出してもいいということ。ということはみなさんの地域でも、「災害時にちゃんと出すんだよね」と確認をとらなきゃいけないということです。

国の法律で決まっても、市町村の条例では決まっていない現状がある。でも基本は出していいことになった。ちゃんと開示できるんですねと確認をとらないとダメですよ。

震災後いろいろと呼ばれてあちこち訪ねます。ある市では熱心にやろうとしているが、隣の区では「自助・共助です」「行政は何もできません」とどうどうとパンフレットに載せている。「あー、もう誰も助けに来ないんだな」と思うしかないじゃないですか。要援護者名簿の開示も、それに基づく支援もないかも知れないということです。でも隣の市に行くと、「今要援護者名簿はていねいに作っています」「実際に開示し支援に行きますよ」という。市町によってかなり温度差がある。

自分のところは本当に大丈夫なのか。それは当事者の人たちがもっと確認して、自分たちのところに安否確認と支援にくるのか、今から本当にやっておいて欲しいと思います。

安心の積み重ねしかない

私たちが福島で生きていて何を思っているか。安心の積み重ねしかないと思っています。国は「安全だ」といっています。でも私たちは安心と思っていません。だから自分たちで安心材料を積み重ねていくしかないなと思っているんですね。

みなさんのところは、こんな風な地域になって欲しくないと思います。東北の被災体験をもう一度振り返ってもらって、自分たちのところを見つめて欲しいと思います。

感想

青田さんの話は何度聞いてもリアルで生々しく迫力がありました。私たちの地域で考えないといけない問題を切々と訴えかけます。

南海トラフの巨大地震など大災害のリスクが迫る中、まずは自助・共助で命を守らないといけませんが、その後長期化する避難生活期においては、名簿を使って一人の漏れもないような仕組みを作らないとダメだと改めて感じました。

障害のある人自身が役所を訪ね、自分の住む街ではどのような仕組みで名簿が開示され、支援を受けられるのか。確かめる必要があります。

報告会のあとで青田さんに勧められた本を紹介します。ちょっと難しいのですが、自治体の災害時要援護者支援の担当にも是非読んでほしい１冊です。役所で交渉するとき「この本を読んでちゃんと勉強してください」と伝えられるとよいですね。　（みずたにまこと）

書名	自治体の個人情報保護と共有の実務 ―地域における災害対策・避難支援―
編著者名	岡本正、山崎栄一、板倉陽一郎／編著
判型	A5
体裁	単行本
定価(価格)	2,835 円（税込み）
本体	2,700 円
ISBN	978-4-324-09754-0
発行年月日	2013 年 10 月 01 日
発行	ぎょうせい

被災した地域の人たちに支援の手を！

法人一丸となって災害支援に取り組んだ石巻祥心会

宮城県石巻市は東日本大震災により、中心市街地のほぼすべてが津波で浸水、全住宅の７割が被害を受け、3955 名の犠牲者を出しました（2013 年８月末、市発表）。その石巻市で震災直後から法人あげて地域支援に打って出たところがありました。社会福祉法人石巻祥心会です。

津波で家を失った地域住民のために空き施設を提供し、避難所で過ごすことが困難な人を見つけては福祉避難所での受け入れを開始。また、いち早くケア付き民間仮設住宅を立ち上げました。

当時の災害対策本部の統括責任者鈴木徳和さん（現・サンネットなごみ管理者）から話を伺いました。福祉避難所開設や専門職ボランティアによる全国からの支援を受け入れる際のヒントも…。

（2013 年 1 月 24 日、就労自立支援センターコスモスにて聴き取り）

利用者全員が無事

震災当日、石巻は震度６強に襲われました。知的障害者入所施設のひたかみ園は川に近く、目の前も運河が通っていました。目の前の運河は増水し、水の向きも変わりました。揺れの後、ひたかみ園の入所者には、通常の地震の避難訓練と同じように避難してもらいました。

津波の訓練はやっていなかったのですが、現場の職員が機転を効かせました。三陸の人間は「大きな地震がきたら津波がくるよ」ということを親の代、祖父母の代から聞かされていました。普段の避難訓練なら外に逃げて人員確認して終了するところ、「これは津波が来るかも」と考えたのです。ひたかみ園は特に重度高齢の方が多かったので、ホールへの一時避難に続き、施設のバスと職員の車を合わせて５、６台に分乗。内陸部にあるサンネットなごみに避難しました。津波の被害に遭う可能性を考えての行動でしたが、功を奏しました。幸い人的被害は出ませんでした。

ひたかみ園の入所者をいち早くこちら（コスモスとサンネットなごみという就労系事業所がある）の方に避難させたので、結果的にひたかみ園は空になりました。

当時のひたかみ園は定員 50 人の入所更生施設（旧法施設）。なごみは定員 40 人の就労継続支援Ｂ型施設でした。コスモス、なごみともに入居機能はありません。

発災当日は訳も分からず、電気も水道も止まっていたので、みんなで「どうしたものか」と頭を抱えて一日過ごしました。

無人のはずの施設を見に行ったら…

３月 11 日は寒かった。入所施設のひたかみ園には布団類や食べ物などがあったので、状況確認を兼ねて物資を取りに翌朝ひたかみ園へ出かけました。

ひたかみ園自体は津波による被害を奇跡的に免れていました。周りは全部水没していたのですが、１ｍくらい土盛りしてあったため、施設の一帯だけ水害を免れることができたのです。

ひたかみ園の敷地には知らない人が何人かいました。事情を聞くと、地域の一般住民の方々がベランダや屋根に避難した後に、自衛隊のヘリコプターで救助・搬送されたとのこと。当時、上空からみたらヘリコプターが離着陸できるのがひたか

み園の園庭くらいしかなかったようです。事前連絡などはなかったのですが、緊急措置として降ろされ、周囲の水が引かないので帰るに帰れなくて困っているという話でした。「落ち着くまではどうぞ」と部屋の一室をお貸しました。

当初無人のひたかみ園に避難したのは一般住民の方々が 20 人ぐらいでした。最終的には他のところからも入ってきて 50 人ぐらいになりました。彼らには敷地内にある法人本部をお貸ししました。

法人全体では６カ所ほどの施設を避難所として開放しました。コスモスやなごみなどの通所施設で帰宅できなくなった利用者や、帰宅困難となった保護者を受け入れました。また被災した別法人にも施設を提供しました。

一般避難所や在宅の障害者も困っている

一方で、通所の利用者で当日幸い家に帰れた人が心配でした。また、相談支援事業等をやっていた関係で、「在宅の方の安否はどうなんだ？」ということになりました。３月 13 日頃から車両や徒歩で行ける範囲で、ご自宅や市内の主要な避難所を回り始めました。いつも支援している方々が一般の避難所にいました。お話を聞いていくと、さまざまな理由で「一般の避難所では居づらい」という話でした。

理事長とも相談をして受け入れを決めました。ひたかみ園は古い施設ですが、20 数部屋の個室もあるので、「２次避難でどうですか？」と声を掛けたところ、ぞくぞくと集まってきました。

石巻では当時、被災を免れた大病院は唯一、石巻赤十字病院でした。そこの地域連携室から、３月 14 日頃、「病院のロビーなどに障害者がたくさんいる」と、当法人に連絡がありました。日赤に搬送されて治療が終わっても、自宅が被災して帰るところがありません。日赤は電気も点いていてよそと比べて居心地がよいので、軽度の知的や精神障害の方々が病院のロビーに滞留していたのです。当時の日赤病院は野戦病院のようなてんてこ舞いで、滞留者が大勢いると治療にも支障が出る。何とかひたかみ園の方で受け入れてもらえないかという依頼でした。

地域の一般の避難所にいる障害者と、日赤病院から紹介された障害者の、主に知的と精神障害の方々をひたかみ園で受け入れました。最終的には 40 世帯ぐらい、多い時は 100 人ほどがひたかみ園で避難生活を送りました。

石巻市中心部の浸水エリア

通常利用していない障害者や地域の人も、困っている人は分け隔てなく受け入れました。福祉避難所で過ごした７～８割は普段支援をしていない新規の障害者でした。みんな着の身着のまま逃げてきた人たちなので、障害

状況もわからず、支援に必要な情報は何もありません。「名前は？」と訊いたら「佐藤です」と言うから「この人は佐藤さんというんだね」という程度の情報でした。

自称「福祉避難所」の開設

避難所指定は後付けでした。実は災害救助法に基づく福祉避難所というのを知らなかったのです。福祉の人間がやっているから「福祉避難所だろう」と勝手に看板を立てて、自称「福祉避難所」を始めたわけです。2～3 週間たって全国の人からいろいろな情報をもらう中で、福祉避難所という制度を初めて知りました。最終的には石巻市から認められて、福祉避難所として指定を受け、最後はお金もつきました。

■ 法人としての震災後の動き

3月11日	• M9.0 地震発生 • 災害対策本部設置 • 法人事業所６ヶ所を避難所として開放（利用者とその家族 約180名） • 炊き出し開始
3月12日	• 法人本部と仮設入所施設に地域住民150名受入
3月13日	• ひたかみ園（入所施設 定員50名）を福祉避難所として設置（40世帯80名） • 石巻赤十字病院からの障害者の受入開始 • 避難所訪問開始（食料の提供、安否確認）
3月14日	• 全国からボランティアの受入開始
4月6日	• 日本財団 助成補助内定
5月9日	• 県・市の協力を経て、２市１町の障害者全戸訪問開始（３ヶ所の相談支援事業所）
5月下旬	• 仮設住宅建設開始 （世帯向40戸、グループホーム２棟）
6月24日	• 仮設住宅 完成
7月3日	• 福祉避難所の閉鎖

避難所の指定を受けていなかったから、当初は自前の物資でやりくりしていました。

就労継続支援事業Ｂ型として法人内の給食を全部作っていたので、冷蔵冷凍の食材は大量にありました。プロパンガスを採用していたので、煮炊きもＯＫ。飲料水は貯水槽にいくらかあったし、生活用水も地下水をくみ上げて使っていた。だから食べること自体は苦労しなかった。ずっと３食食べていました。

３月 14 日頃、市役所に徒歩で行って、「こういういきさつで避難所を立ち上げ、こういう取り組みをしている」と話したら、「わかりました」と、そこからはすぐに支援物資を回してもらえるようになりました。それ以前に 12 日の夜にはすでに全国から支援物資が届きはじめました。仙台の施設から紹介を受けたという関西のテキ屋さんが焼きそばやフランクフルトを届けてくれるなど、食べ物には困りませんでした。

服もある程度早い段階でそろいました。暖房器具だけは最初なかなか揃いませんでした。

ひたかみ園の入所者について

事情がちょっと複雑です。震災が ３ 月 11 日。ひたかみ園はもともと年内に建て替えるため、３月 14 日に引っ越して全部取り壊す予定でした。震災当日には８割方引っ越しが終わっていて、残るは利用者さんと２～３日分の食料と布団だけという状態でした。

３日後に引越完了を控えて、施設の中はほとんど空だったので、福祉避難所にするのは楽でした。

工事期間中の仮設の入所施設を作ってあったのですが、そこも知らない間に地域住民の方が入られていました。「出ていってくれ」と言う訳にもいきません。

だから、ひたかみ園の利用者さんには、しばらくはサンネットなごみで過ごしてもらい、不便な思いをさせてしまいました。入所者の中で比較的軽度の方にはグループホームの方に移ってもらいました。法人内に 12 カ所ほどあるのですが、一人部屋のところを３人部屋で使ってもらうなどして、グループホームの方に移ったのです。

仮設の入所施設に避難している住民には「家に戻れる方はすみませんが家に戻って下さい」「ここは福祉施設なので一般の避難所の方に移って下さい」と、行政の方と一緒にお願いをしにまわりました。本来住む権利があるのは入所者なのですが、地域の方にこういう状況で出て行けとは言えず難しかったです。結果的に１ヶ月後には出て行って

もらって、ひたかみ園の利用者が本来入るはずの仮設の入所施設に入りました。

民間主導のケア付き仮設住宅

取り壊す予定のひたかみ園で福祉避難所をやっていて、私たちも避難者の次の行き場を考えないといけませんでした。一般の避難所で生活するのが困難な人たちなので、一般の避難所に戻すわけにもいきません。行政にも３月下旬からずっと掛け合っていて、「県が設置する仮設住宅に入れて下さい」とお願いをしました。

市からは「必要性は認めるが、現実的には難しい」との話。当時、石巻市内に約８万人が一般の避難所などで避難しており、80～100 人を優先的に仮設住宅に入れるというのは難しいというのです。

さて困ったなと思っていたところ、日本財団の調査チームが来られたので、窮状を訴えました。「大変な問題なので東京の本部に掛け合います」ということになり、そこからポンポンと話が進みました。最終的には４月６日、仮設住宅建設費用、約１億６千万円の補助内定が出ました。

業者に仮設住宅を発注しましたが、国内の仮設住宅用資材は国に全部押さえられており、建設屋さんは苦労したみたいです。最終的には中国から資材を持ってきていもらい、６月 24 日に完成しました。

ケア付き仮設住宅は地名をとって「小国の郷」（おぐにのさと）と名付けられました。最後まで福祉避難所に残されていた約40世帯の方たちに仮設住宅に移っていただいて、福祉避難所を解消しました。

ケア付き仮設住宅「小国の郷」

建物は、今回の震災で亡くなられた法人の理事所有の農地（民地）に建てました。日本財団の出資により民間ベースで建てられた珍しい事例になりました。石巻市の仮設も第１号は６月下旬だったと思うので、ほぼ同じタイミングでした。

障害のある人の見守りを中心に（買い物、通院、相談）職員３人を配置して対応しています。

一方で、さまざまな問題があります。建設費と最初の１年間の人件費は日本財団の方からいただきました。２年目以降は県の事業で助成金をいただいていますが、主に人件費です。建物の保守と取り壊し等にかかる費用は出るあてがありません。

法人一丸となって災害支援

実は、地域の拠点になるぞという覚悟がないまま震災という現実が先行しました。意志決定として大きかったのは３月 11 日の夜に、理事長をはじめとする幹部（管理者クラス）が集まり、外で火を囲んでこれからどうしようと協議したことです。２つの柱ができました。当法人は平成３年に設立されて、ちょうど 20 年を迎えていました。１つは「地域に支えられて 20 年、今こそ恩返しをする時だ」ということ。もう１つは、理事長が最後に言った言葉で、今も強烈に覚えていますが、「新しいものをつかむためには、今握っているものを離さなければいけない」ということです。「地域の人に必要な所を囲うな」「必要な所に必要なものを渡せ」と言われました。一同が「ああ、なるほど」と納得しました。

初日の夜には基本方針が決まりました。自分たちの身の回りのことだけやっていればよいのではなくて、「地域の方々にも必要な支援を」という考えなんだと受け止めました。方向性が決まったので、そこからは楽でした。基本的に困っている人に対して、答えはほぼイエスなのだろうなという感覚で動きました。

出入りの業者よりいただいた卵をゆで卵にして避難所へ物資として提供。また「避難所でも暖かい食べ物を」という気持ちでキャラバン隊を結成し、授産活動により培ったパン製造の技術を活かした焼きたてパンをはじめ、甘酒、綿あめを地域の避難所に提供しました。

日本財団の取り計らいにより、東京と静岡の社会福祉法人から移動入浴車の提供をいただきました。さらに大崎市長のご協力のもと温泉水の提供と、ライオンズクラブからテントの提供を受け、市内の小児科医院跡地と虻田公民館、牡鹿町老人憩いの家の３カ所に“天然温泉ひたかみの湯”を開設し、地域の方に無料で入浴を提供しました。

天然温泉ひたかみの湯

必要な医療が受けられない

結果的にひたかみ園の入所者が一番不便を強いられました。でも、実際のところ支援は思ったほど大変ではなかったと思います。よくいろいろな人に「自閉症の方は大変でしょうね」と言われます。確かに大変だった人もいるが、結果的には重度の方というのは状況をよく理解していて一番手がかからなかった。普段水にこだわる方も、水道をいくらひねっても水が出ないとなれば、今は出ないのだと理解してもらえました。逆に軽度の人は要求がある分、対応が大変でした。語弊はありますが、重度の人の方が楽でした。ただ、3 週間余りを大部屋で雑魚寝の状況でしたから心理的なストレスは相当あったと思います。

電気は、ここ（コスモスとなごみ）は３月 20 日前後に、福祉避難所（ひたかみ園）の方は３月 31 日に戻りました。断水中は給水車を優先的に回してもらい、計画的に水を使っていました。

一方、医療面で治療の必要な人の対応は大変でした。病院が日赤しかない。救急であっても職員の数が足りない。救急車を呼びたくても電話が通じない。職員が、施設と病院を行ったり来たり、一日に何往復もしていました。

福祉避難所においても精神の方々が着の身着のまま避難しており、薬を持っていませんでした。薬が切れても、石巻日赤には精神科がないから精神の薬が最初は足りませんでした。精神の方々の対応には苦慮しました。

何度も言うように病院は野戦病院のようでした。当時の病院というのは、命の危険にさらされている人のみの対応でした。重度のてんかんの発作を繰り返す障害者がかかっても、その時状態がよければ治療の必要なしと病院から戻されました。戻ってくる車の途中でまた発作を起こして、どんどん重篤になっていくのです。看護師も「状態が良くない」とかなり粘ったようですが、病院からすれば今医療を必要としない人を病院に置いておくわけにはいかないということで帰されて、重篤の発作で１人亡くなってしまいました。震災関連死だと思います。

第二ひたかみ園の通所利用者の方も投薬は受けていましたが、てんかんが重なって大変でした。

宮城ではてんかんは岩沼にある、てんかん専門病院ベーテルが主に担っていました。亡くなった方も多くの利用者も、そこが主治医でしたが、当時岩沼までは行けませんでした。

マンパワー不足と広域支援の受け入れ

人手は足りませんでした。足りない理由として、当初はガソリン不足で通勤できないことが多かった。「ガソリンがなくて動けないのなら迎えに行くよ」といって、職員用の送迎を５カ所くらい組んで、とにかく出勤できる態勢をとりました。

福祉避難所を開設すると、どうしても通常のサービス＋αの部分があるので、必然的に人手が足りません。国の基準だと障害のある人 10 人におおむね１人の生活支援員。見ず知らずの人 10 人に１人なんかでは到底やれるわけがないので、全国の専門職ボランティアの方々に協力を仰ぎました。

震災当初は、職員の余力のないなか３～４人の職員が 3~4 日寝ずに自前で何とかやっていました。そのうちに個人ボランティアが何人か入るようになってきました。申し出があればとにかくお願いをして、最初は山形の人たちが来てくれました。でも個人ボランティアなので土日に来て月曜

日に帰って行くパターンでした。

平日が回せなくて困っていたところ、新潟のある社会福祉法人の理事長さんが事情を聞きつけて電話をかけてこられました。社会福祉法人りとるらいふ理事長の片桐公彦さん。ご自身も中越沖地震で被災経験がある方です。「状況どうですか？」と聞かれて、「ボランティアが足りない」と訴えたら、「わかりました」と、ボランティアのコーディネートを買って出てくれました。こちらからオーダーを出すだけですみ、助かりました。「１週間単位で５人ぐらい欲しい」とか「今女性の避難者の方が多いので女性の支援を多くして下さい」とか、「医療ベースの人が増えているので看護師１人貸して下さい」とかお願いしました。

また初期は京都の方にも大変助けられました。「長期戦になってくるときついな」と言いながら支援してくれました。相楽福祉会さん、西陣会さんなどです。最後の方は神奈川県知的障害者福祉協会に助けられました。神奈川の湘南セシリア（社会福祉法人 藤沢育成会）の河原さんに、神奈川県下の施設を取りまとめていただきました。７月の末福祉避難所が閉鎖になるまで、ずっと神奈川の人で回してもらいました。

広域支援を受けることで、何とか福祉避難所を運営することができました。ボランティアに支えられて、我々も元気をもらいながらやっていました。ボランティアがいなければここまでの取り組みはできなかったと思います。

ただのボランティアではなく福祉ボランティアだからできた仕事です。経験年数が５年 10 年の方々が多かったので、我々より知識も経験も豊富でした。ひとこと言うと、すべてやってくれるのですごく助かりました。

オーダーしたわけではないけれど、ある程度スキルのある人が結果的に来てくれました。５人チームを組んでいると１人は施設長クラスの人がいました。必ず引き継ぎの日を一日作ってもらって、ボランティア同士でやっていただけたのは助かりました。受け入れ側がいちいち説明するという手間がなく、ボランティア同士でうまく繋いでいってもらえました。

全壊したグループホーム「くじらのしっぽ」

活かすべき教訓、反省点、課題

職員では１人、グループホームの世話人が夕方の出勤途上で被災して亡くなりました。法人理事も２人亡くなりました。職員の家族に広げていくと、あまりにも多くて把握できないほどです。

震災１年後に法人の職員に当時のレポートを書かいてもらったところ、職員もかなりストレスを抱えながらやっていたことが分かりました。理由は、家族の安否もわからない中で、仕事優先でやらざるを得なかったという苦労が半分以上を占めました。職員も思うところはあったと思います。

３月 11 日の夜に法人の方向性が出され、それに沿って行動はしてきましたが、実は統括責任者として、職員の温度差に震災当初最も苦慮しました。

例えば、通所の職員に 24 時間の連続勤務を命じていた時に「これは業務なのか？これはボランティアなのか？」と問われました。仕事でやっているのか、社会的使命で我々はやらされているのか、という話に当然なってきたのです。職員の被災度合いも違いました。皮肉なことに被災度合いが大きい職員ほど黙って活動しました。家が流出した職員などは住み込みで頑張ってくれました。地震被害しかない職員は、生活が比較的早く復旧しているので「早く普通の状態に戻したい」と感じたのでしょう。はっきりと言わなくても、何となく仕事ぶりにも出てきました。

当法人は組織が比較的大きく、約 160 人の職員がいるので価値観も様々です。事前に「うちの

施設はこうするよ」と取り決めておけば、家族にも「こういう災害があった時には、１週間は帰って来られないと思え」とか言っておける。家族からの非難も軽減されるでしょう。事前に方向性が決まっていなかったから、「あの時家に帰りたいと言っても帰してもらえなかった」というしこりが残ってしまいました。

全国のそれぞれの地域によって想定される災害というのは違うと思います。最大規模の災害の想定をして、法人または事業所はどのように行動をするのかということを事前に決めておいた方がよいと思います。例えば、「職員を守るためにサービスは全部中止しました」と決めた事業所もあれば、「サービスの利用契約されている方々を 100%守りに行きます」という選択をされた法人もある。当法人のように「地域の方々に必要な支援をする」と決めたところもあります。大変さは違いますが、それぞれにきちんと事前に決めておかないといけません。

事前の取り決め、いざという時の態勢は意思統一しておくべきでしょう。発災初期の混乱の中、ああいう状況になると職員の個人個人の意見は聞いていられなくなることを想定して。

インタビューを終えて

「大震災と障害者」シリーズで石巻市の事例を紹介するのは伊勢知那子さん（117 号）、新田綾女さん（124 号）につづいて３回目です。伊勢さんのご家族も避難所にいる時に石巻祥心会さんの安否確認を受け、２次避難を勧められたことを感謝していました。一般避難所や在宅で孤立する障害者にとって、石巻祥心会さんのような支援活動は心強かったに違いありません。

近年の大災害で、福祉避難所の開設や障害者の安否確認でうまくいった例は、2007 年の新潟県の中越沖地震くらいでした。中越沖地震では、2004 年の中越地震の教訓を活かし、①福祉避難所への県内外からの介護職員派遣、②柏崎市では障害者名簿を民間２団体に開示しての安否確認、を見事に実施しました。どちらも県からの応援部隊が加わって初めて実現しました。被災自治体と地域内の民間の力だけでは解決しないからです。

一方東日本大震災では、厚労省の介護職員等派遣事業において、約 8000 人の応募があったにもかかわらず、実際に派遣されたのは 7.5%に当たる 600 人程度にとどまりました。国から県、県から被災自治体に照会文書は届いても、被災自治体では行政機能がマヒし、現場のニーズを吸い上げることができなかったからです。国や県、中央の組織が前面に出て、アウトリーチで現場の声を拾い支援を届ける仕組が必要です。

宮城県では他に、拓桃医療療育センターの田中総一郎医師（現在、東北大学准教授）が、在宅酸素業者とともに医療的ケアを必要とする障害者の自宅をまわり、大きな力を発揮されました。

いざという時、徹底した現場主義と地域志向を貫けるか。福祉現場には日頃の仕事の仕方が問われているのと同時に、広域連携の仕組みづくりの課題が行政、障害当事者団体及び福祉サービス事業所に問われていると思います。　　（水谷真）

障がい者支援施設
はまなす学園

避難先を転々…
仮設施設で今なお苦労

とっさの判断　迅速な避難誘導で全員が無事

大災害の時、障害者が過ごす施設はどんな状況になるのでしょうか…。

岩手県山田町の知的障害者支援施設はまなす学園は、東日本大震災の津波で全壊し利用者が避難生活を送りました。

発災時、施設長の機転でいち早く利用者をバスで高台に避難させ、利用者 41 名全員が無事。平時の避難訓練や避難マニュアルにはないとっさの判断が功を奏しました。

しかし命拾いした後にとんでもない修羅場（避難生活）が待っていました。一般の避難所には入れず、自力で避難先を開拓し、現在の仮設施設に移るまで 3 カ所の集団移転を余儀なくされました。日に日にひどくなるてんかん発作や発熱、下痢、徘徊。施設職員は、自身の家族の安否確認もできないまま、ものすごい使命感で 24 時間、不眠不休で利用者の支援に…。

（2013 年 1 月 30 日、仮設施設にて芳賀幸一施設長（当時）より聴き取り）

とっさの判断と迅速な避難誘導

施設は船越半島を上がったところにあり、男子棟、女子棟、管理棟がクの字に並んでいました。大地震により石膏ボードの天井と壁が崩れ、いち早く避難を決意しました。当時、外出者はなく、15 時からケア会議の予定で、職員が勢揃いしていたのが幸いしました。

大きな地震が 10 分ほど続く中、職員はまずは利用者を落ち着かせようと必死でした。そんな中「玄関広場に避難させろ！」と施設長が放送。思わず命令調になりました。その直後に停電。同時に自火報（自動火災報知器）が作動し、非常ベルが鳴りました。訓練では「ベルを鳴らしてください」と呼びかけてから鳴らす段取りだったのが、自火報が先に入ってしまい、利用者はパニックになりました。

津波被害を受けた「はまなす学園」

職員が利用者を屋外に避難させました。築 30 年近い施設の中では、吊り天井の石膏ボードが砕けて白い煙が立ちこめていました。非常灯の大きいカバーも飛び散りました。揺れが続く中、利用者はすくんで動けません。消火塔は倒れ、長い地震が続きました。

施設長はとっさに重油式のボイラーのバルブを締め、厨房のガスの元栓を止めました。

訓練では、地震の際徒歩で裏山に逃げることになっていました。となりの老人保健施設「シーサイドかろ」の裏を通り、Ｂ＆Ｇ海洋センターの体育館に避難する計画です。

徒歩がいいかどうかを考えて、とっさに車での避難を決意しました。マイクロバスとハイエースを出すよう職員に指示。自力で動ける軽度の利用者に乗車してもらったものの、混乱した利用者が走り回る中、多くは抱きかかえて乗せました。

発災時は入浴の最中で、重度の人は入浴が終わって部屋着でくつろいでいました。取りに戻るつもりで、ジャンパーも着ずに、みな部屋着のまま避難しました。入浴中の利用者はバスタオルを巻いたまま逃げました。

第１便をマイクロバスでＢ＆Ｇに上げ、残りをハイエースで搬送。定員オーバーでも詰め込みました。Ｂ＆Ｇまでの上り坂を車で１～２分。余震

が続く中、15 時過ぎには全員避難を終えました。

マニュアル通りだったなら、テラスの吊り天井が落ちてきたり、徒歩で 20 分もかかるなか津波に巻き込まれる可能性がありました。

避難の際、現金や登記簿謄本は頭にありません。ただ利用者の薬だけは最優先に考えました。応援部隊が入った時のことも考えました。てんかん発作の薬や向精神薬などは袋に入ったままで持ち出しました。利用者の保険証や療育手帳は、１人ずつ予めセットされていたものを持って出ました。

余震が続く中、倉庫に保管してあった非常食と水を男性職員３人で車に積み込みました。普段使わない防災備蓄品は倉庫の奥にあって出すのに手間取り、３～４日分しか出せませんでした。揺れている中、手探りで探すのは困難で、備蓄品は取りやすい手前に置くべきと悔やみました。

オートキャンプ場（２次避難）

Ｂ＆Ｇのグランドまで逃げたものの、津波はぎりぎりまで迫りました。危険と判断してさらに上の家族旅行村というオートキャンプ場まで逃げました。歩ける人は徒歩で上がりました。普段は景色のよい散歩コースでした。あたりは真っ暗になり、全員薄着だったので寒く、濡れている人もあって大変でした。

家族旅行村では６～７人用のケビンハウス３棟を間借りすることにしました。最初は窓を割って入りました。上にいた管理人があとから駆けつけ、残りの棟の鍵を開けてくれました。

家族旅行村のケビンハウス

ケビンハウスには８人分の布団とガスコンロがありました。職員を含め 50～60 人が寝ることになり、１つの布団に２～３人が寝ました。反射式ストーブを使いながら１晩を明かしました。

高台だったので、山田湾を挟んで対岸の炎と爆発が見えました。自動車とガスボンベも延焼して爆発していました。職員は「あそこが自宅だ、だめだ」ともらしていました。利用者には津波を見せませんでしたが、山田町の街が赤く燃えるのが利用者の目にも映りました。

道路は瓦礫で埋まり、半島から戻れません。

ラジオはない、携帯もつながらない。携帯はバッテリーをもたせるため、職員に指示をして一部の人のみ電源を入れさせました。

助け出したはいいがこれからどうするか、見当がつきません。情報がなく、日本中がそうだと思ったくらい、孤立していました。見通しが立たない中、そのまま流された方がよかったかなと、正直なところ悲観的になりました。

３月 12 日の朝、自衛隊のヘリが飛んできたので、シーツを振って生存者がいることをアピールしました。３月 13 日午後になって、道路の瓦礫撤去が終わり、本土の方にいけばどうにかなるかなという見通しに変わりました。

大きい車は通れないので、小さい４輪駆動車で電柱や泥をよけながら走り、避難先を探しました。山田町の公民館はすべて埋まっていて、50～60 人もの集団避難はことごとく断られました。

陸中海岸青少年の家（３次避難）

山の中にある県立陸中海岸青少年の家を訪ねたところ、幸い避難者が少なく、受け入れＯＫとい

うことになりました。ただし、電気も水道もトイレもないよと言われました。

利用者と非常食、ケビンハウスの布団とストーブも拝借して、青少年の家との間を２往復して搬送しました。

道路の瓦礫は建設屋が撤去してくれましたが、釘もガラスもありました。家が道路の半分まで倒れてきている中を、マイクロバスの車体を傷つけながら、バキバキいく感じで、決死の覚悟で通っていきました。泥にはまれば脱出できないので、ローギヤのまま青少年の家に向かいました。29人乗りのバスに 30 数名と荷物を乗せ、無事到着しました。移送は暗くなるまで続きました。

陸中海岸青少年の家

青少年の家では、最初体育館で一般の人と一緒に過ごしました。とにかく寒かった。重度・中度の利用者は不安とストレスを高め、職員の疲労もピークに達していました。利用者は混乱し、徘徊、尿失禁、便失禁が頻発。ガラスを割って無断外出しようとすることもありました。

青少年の家の所長にお願いして、知的の人と健常者が一緒では困難なことを訴え、２階の会議室を借りることができました。ただ 30 畳ほどのワンフロアに 50 人が寿司詰め状態で、足を伸ばす余裕すらない状況でした。そこで１ヶ月間過ごしました。

自衛隊が来るまでは、持ち出した水と乾パンと薬でしのぎました。一般の避難所はもっと早かったようですが、自衛隊が来るまで３日間はかかりました。３日分の備蓄は重要と実感。自衛隊の炊き出しが始まっても、当初は１日おにぎり１個でした。利用者は運び出したわずかな非常食を分けあい、飢えをしのぎました。

水洗式トイレは断水のため、下の池からバケツで汲んできて、その都度流して使いました。浄化槽が一杯になったら終わりでした。

フロア材の下がコンクリートだったので、敷いた布団が一晩で湿りました。昼間、いすやテーブルの上で乾かしながら使いました。

ガソリン不足が深刻でした。自動車のガソリンが半分以下だったのが悔やまれました。公用車も自家用車も半分以下になったら給油すべきです。今はそのように徹底しています。

職員の通勤車両はすべて流されました。このため、非番の職員が駆けつけても、職員が帰る足（車）がありませんでした。通信手段もなく、衛星電話が通じるのも地域では最も遅かったです。

外部からの支援

自衛隊が来てから食料は徐々に入ってきました。

県の障害福祉課や山田町職員が訪ねてきて何が必要かを訊かれました。保護者の安否が確認できなかったので、まずは保護者との連絡を県職員にお願いしました。

社協と障害協のはからいで、県内の施設から物資と人材が徐々に届くようになってきました。自衛隊には１人１個の制限があったが、障害協には特に制限がなく、何が欲しいかを訊かれて、懐中電灯、カップ麺、水、衣料品、トイレットペーパー、日用品など、必要なものをその都度届けてもらいました。着るものがなかったので、まずジャンパーをお願いしました。中古衣料でもよかった。届いた物資は一般の避難者にも提供しました。

非番の職員が出てこられるようになっても、マンパワーはさらに必要でした。１人来たから１人帰れるわけではない。当初の職員は２週間帰ることができず、食べ物も不足し、風呂にも入れない生活が続きました。

職員もノロウィルスとインフルエンザにかかりましたが、代わりの要員がいないため、支援を続けざるを得ません。日赤が薬やパーティションを届けてくれ隔離しても、限界がありました。

１ヶ月ごとの通院が必要な利用者がいました。移動手段がないので県に依頼し薬を届けてもらいました。利用者のかかりつけ医療機関（宮古市）

に問い合わせ、流されなかったカルテをもとに向精神薬やてんかんの薬等を処方してもらいました。

そのうち県内の内陸部と全国からの職員が３～４日交替で派遣されてきました。当直にも入ってもらえるようになり、職員が休めるようになってきました。「みてますから休んでください」「トイレの時は起こしますから」と申し出を受け、５分でも10分でも休めるのは助かりました。

職員移送については、県の障害協が手伝ってくれたり、流されなかった自家用車で駆けつけました。災害看護機構も飛行機やレンタカーで来てくれました。自治体や医療機関の関係もゼッケンをつけて随時入ってくれました。

施設長の姪が盛岡に住んでいて、はまなす学園の利用者が全員無事で青少年の家にいることをラジオに投稿し告知してくれました。

保護者とは連絡がとれない状況が続いていました。保護者たちははまなす学園が流されたことを知り、遺体安置所を回っていたそうです。

旧・ホテル陸中海岸（４次避難）

青少年の家には１ヶ月しかいられませんでした。山田町立船越小学校が被災して、青少年の家を使って授業を再開することになったからです。教育委員会から内陸の施設に移動してくれないかという要請がありました。

避難先の旧・ホテル陸中海岸

旧・ホテル陸中海岸の建物に避難することになりました。４月11日から７月15日まで３ヶ月余りを過ごしました。

電気もトイレもない。湿ってはいたものの、布団だけはありました。

大きい発電機を借りることができて、夜の 17 時から 20 時までは灯りがつくようになりました。反射式ストーブも提供いただき、使えるようになりました。

自衛隊からおにぎりを提供してもらったものの、依然足りないので、利用者優先となり職員は残ったものを食べました。お腹がすいても食べるものがありません。雪を食べる職員もいました。実際には寒くて雪も食べれません。喉も渇きました。

髪が臭い、口が臭い、服が臭かったが、麻痺して分からなくなってきました。利用者の尿失禁、便失禁も気にならなくなってきました。

自衛隊が仮設風呂を作ってくれたので、週１回ペースで出かけました。一般の人と一緒なので、入浴介助は大変でした。ノーマライゼーションも大切だけど、避難時は障害者と高齢者は分けて手をかけてあげないとうまくいかないと感じました。

折りたたみテーブルで目隠しされたポータブルトイレ。2011年4月13日ＡＪＵの救援部隊撮影

旧・ホテル陸中海岸には、法人母体（社会福祉法人親和会）が小規模多機能施設を新築中で、竣工直前でした。利用者募集もしていない段階でした。そこを引き渡してもらい、お風呂が使えるようになりました。

親和会では震災により、①はまなす学園、②ケアホーム希望、③わかき保育園、④高齢者小規模多機能施設やすらぎ、がすべて流失しました。幸い人的被害はありませんでした。③と④の通所・ショートの利用者は家に帰せましたが、①②ともに家に帰すわけにいきません。自宅に帰れる人は率先して帰したり、他の施設に移りたい人もいて、意向を尊重しました。

ホテル陸中海岸への避難中、北海道知的障がい福祉協会の申し出により職員を派遣してもらいました。週に６人ずつ交替で、２ヶ月にわたって派遣を受けました。看護師１名と支援員５名が、次の部隊との引き継ぎをした上で、乗ってきた車で帰っていきました。交通が遮断されていて、北海道から来るのに飛行機で成田を経由して花巻に入ったり、三沢を経由してレンタカーで入ってくれ

ました。

青森県からも１ヶ月にわたって派遣を受けました。青森は岩手を、秋田は宮城を、山形が福島を支援する態勢が敷かれました。

派遣元の方で１日ずつ重なるように派遣してもらい、引き継ぎも自立的にやってくれたのは助かりました。

特養や老健などの高齢者施設よりも障害者施設の方が早く動き出した印象があります。物資も人的支援も比較的早くきました。

職員を出す方としては、地震、津波、被爆、感染症に関する心配があったようです。助けに来てくれたときは、街中に海と泥の匂いが漂う中でした。食べ物も、お湯で戻すアルファ米とカップ麺と缶詰しかなく栄養の偏りがありました。１週間のうち１日だけ、温泉施設を紹介して休んでもらいました。

派遣職員には、旧・ホテル陸中海岸の空き部屋を宿として使ってもらいました。中には「今日は泊まりますよ」「少しでも休んで下さい」と言って利用者と一緒に寝てくれる方もいました。

職員派遣の応援を受けるようになってから、ようやくシフトが組めるようになってきました。とはいえ眠るどころではなく、帰宅どころではなく、今日は何日か分からないような緊急態勢が続いていました。

仮設施設での再開

７月 15 日、はまなす学園は岩手県内で最も早くプレハブ仮設を建設し、再開を果たしました。法人経営者からの要請と山田町の取り計らいがありました。土地は身内の土地で理解がありました。

高齢者型の１棟 10 人規模のプレハブ仮設が２棟。そこに男子 19 名、女子 14 名が入居しています。１人部屋に２人が布団を敷くので、足も伸ばせません。男子は特に窮屈で、10 名分の食堂に 20 名入っています。決して快適ではありません。

入居者 38 名がグループホーム型の仮設施設２棟（男子棟、女子棟）に引越

女子は１シーズン目 2012 年３月に 14 人中 12 名がインフルエンザに罹りました。隔離しようがありません。職員が感染して休みたくても、代わりに支援する人がいません。同性介助のためには、インフルエンザにかかっても「熱が下がれば出てきてよい」と保健所の許可の下でどうにか乗り越えました。

２～３月がピークです。近くの××小学校が学級閉鎖、山田の××保育園が閉鎖…、とどんどん蔓延して、外出を控えさせました。

毎日通院者が多いです。震災前より状態が落ちました。障害程度区分４の人が５に、５の人が６に落ちた人も数名います。

言い方が悪いですが手のかかる利用者が増えました。ストレスが増えたり、身体が動かせないことが原因と考えられます。男子は壁を破ったり、ガラスを割って無断外出を図ろうとすることが増えました。

仮設施設の仕様について、厚労省が来てヒアリングを受けました。決まり切った仮設は早くできるためには仕方がありませんでした。ユニットバスが使いにくく、介助には向いていません。居室に洗面はなくてよいから、収納スペースがほしい。さまざまな要望を出しました。

後付け改修は通路（棟間の渡り廊下）のみ認められました。19 名も入る風呂なのに、お風呂は追い炊き機能がない。通路の風よけがほしい。他にもいろいろ県に要望しましたが、認められませんでした。

洗濯物が屋外に干せないので、居間を占有してしまっています。仮設施設の厨房は 10 人規模で狭い。屋外の舗装が狭すぎて、車いすでの散歩もできません。困りごとを上げるときりがありません。

今後の災害対策

非常食と水の防災備蓄、暖房と発電機、照明と反射式ストーブの整備は必要です。発災前は「非常食くらいで十分」と考えていました。災害用毛布、衣類も必要と分かりました。

防災計画はまだ打ち出せていません。新施設に入ってからでないと、避難場所も特定できないからです。2012 年 12 月７日の地震と津波注意報では、職員は 21 時まで待機しました。揺れもひどくて倒れる心配がありました。その時から、電源が落ちたときのために、反射式ストーブ４つと灯油の買い置き、懐中電灯を慌てて用意しました。

ガソリンは満タンにしておき、車は出やすいように前向きに置くようにしました。避難を徒歩によるか、車によるかは場合によります。車は渋滞もあり得るし、津波で車ごと流されるかも知れません。

はまなす学園の場合はタイミングがよかった。100m 先の家族旅行村に逃げるのも、5～10 分後だったら渋滞にかかっていたと思います。

津波被害を受けた７人乗りハイエース

震災の２日前に納車されたばかりの７人乗りの車は、冬タイヤが乗ったままになっていて、一度も乗らずに流されました。

東南海地震の心配がある海辺の施設から、避難の相談をうけますが、決して車移動がいいとは限りません。避難マニュアルを作る場合、移動手段は１つだけでなく、車の場合、徒歩の場合を分けて考えておくべきです。火災をともなう場合も含めて、その場の判断を働かせなければいけません。

徒歩の場合はどういう人を優先するか。歩ける利用者は５人に１人つくと決めたとしても、手をつないだり、抱きかかえる必要のある人もあり、現場で判断しないとダメ。大型運転手がいない場合はどうするか、職員が手薄な場合はどうするか。判断が結果を分けると思います。

職員の参集と動き方については、非番の人が警報が出たときに来られるのか、場合分けしてシミュレーションする必要があります。その通りいかなくても、選択肢は用意しておいて、最善を選ぶことになります。法人では夜間震度４は参集することになっていますが、津波警報の道路にぶつかったら来られません。携帯がつながらず通信手段が断絶し、上司の指示が仰げない状況も想定すべき。自己判断の訓練が必要です。

隣の施設の事務長も最後まで残っていました。自分も最後まで残って、居室をみて歩いてから避難しました。

施設の場合、集団避難先は考えておくべきです。しかし街の中に瓦礫があったり、火事もあって想定通りにはいきません。自分たちはとりあえず船越地区の避難所というくらいの想定でした。

理事長が合流したのは２日後でした。理事長がきてからは理事長の判断に委ねました。それまでは、施設長の判断で避難を決めました。

新施設での再建へ

避難先となった旧・ホテル陸中海岸 一帯を整備し、震災前から小規模特養や高齢者住宅などの複合福祉施設「福祉の里」構想を進めていました。土を入れてかさ上げして建築する予定でしたが、町役場の計画が進まないため、別の地区での整備を決めました。１人１部屋の43～44部屋の居室。食堂、作業室。12 月竣工の予定。2013 年度中に引越したいと考えています。

インタビューを終えて

「修羅場をくぐり抜けてきて、いつ引退してもいいと思えるくらい」という施設長の言葉が印象的です。それほど休まる暇のない必死の活動を続けて来られたのだと感じます。職員自身、家を流されたり、車も流されたり、親を亡くした人もいたそうです。

大災害により混沌としながら刻々と変わる状況。そんな中、最後は現場の判断力、決死の覚悟と行動力が問われるのだと気づかされます。

制度や法律、決められたことに従って生活するのに慣らされた福祉現場としては、目の前のこの人たちに今できる最善のことは何か。限られた資源の中で考えるトレーニングが求められているのだと思います。

＊　　＊

今年の１－２月、岩手、宮城、福島の３県の被災地をめぐり、被災した障害者と家族、支援者 44 件 53 名から聴き取りをさせてもらいました。今後予想される巨大地震で、東日本の不幸を繰り返さないため、一番に確かめたかったのは亡くなった２万人以上の人々の無念の思いです。それは叶わないのですが、亡くなった人も生き残った人も紙一重でした。生き残った人も１分１秒を争い、死の淵を渡ってきたのだと判りました。

大災害によって生活を支えるあらゆるものが失われた時、どうやって生き残れるのか。南海トラフ巨大地震の脅威が迫る私たちも一人ひとり考えないといけません。　　（水谷真）

ＡＪＵ被災地支援活動報告より

2011 年４月 13 日(水)

１７:４０…社会福祉法人親和会　はまなす学園の福祉避難所「ながめ」

- 日本ユニバのMさんからの紹介で訪問した。
- 親和会Ｓさんが対応してくれた。
- 上下水道が使えずポータブルトイレを使用しているが、間仕切りが無く困っているとのこと。
  （折りたたみのテーブルを使い目隠しにしていた）
- 宮古市から借りられることになり、翌日午前中に持っていくことを約束した。
- お菓子、水、乾電池、缶詰を置いてきた。
- 欲しいものは、ポータブルトイレの凝固剤と防臭錠、シャンプー、リンス、ボディーソープ。

１８：３０…宮古市の港湾倉庫で間仕切り１箱積み込んだ。
→翌日「ながめ」に届けた

福祉避難所「ながめ」を訪ねる江戸常務
2011 年４月 13 日

出典　https://bfmap.info/ecom/index.php?module=blog&eid=13255
https://bfmap.info/ecom/index.php?module=blog&eid=13314

2011 年４月 13～14 日、ＡＪＵの救援部隊第４陣（隊長＝江戸常務）が旧・ホテル陸中海岸（福祉避難所ながめ）を訪ね、避難所間仕切りセットや救援物資を届けました。

この時届けた間仕切りは、今も仮設施設の女子棟でキッチンと食堂を仕切るのに使用されています。

仮設施設で今も使われる間仕切り
2013 年１月 30 日

障害があっても地域で当たり前に暮らせる街にしたい

石巻市で被災した新田理恵さん

新田理恵さんと次女・綾女さん

東日本大震災により石巻市大街道地区で被災した新田理恵さん（42）。夫婦と娘２人の４人家族で、次女 綾女さんが医療的ケアを必要とする重度心身障害児（震災当時小学校６年生）です。新田さんは、石巻重症心身障害児(者)を守る会に所属し行政に働きかける活動をされる一方、在宅介護をする立場から災害時の避難支援のしくみを提案。

誰もが住みよいまちづくりは災害リスクの低減につながる ── そんなことを学ばされます。

（1 月 24 日、被災地障がい者センターみやぎにて聴き取り）

車で高台へ避難

震災当日は石巻特別支援学校に通う次女の小学部の卒業式があり、夫と次女の３人で出席しました。学校から戻り自宅で一息ついているところで地震に遭いました。

立っているのが困難なほど強く、とても長い揺れでした。揺れがおさまらないうちに、すぐに停電になり、外からは大津波警報を知らせるサイレンと、避難を呼びかけるアナウンスが聞こえてきました。長女（17）は高校が休みで遊びに出かけていました。揺れがおさまった直後に長女と携帯がたまたまつながり、安全な場所にいて無事なことが確認できました（長女は３日後に迎えに行った)。津波が本当に来るのかなという感覚はありましたが、次女の障害のことがあり避難を決意。避難の準備を始めました。

次女には重度の障害があり、気管切開からのたん吸引、胃ろう造設による経管栄養などの医療的ケアが必要です。吸引器や薬、栄養剤など、娘に必要な物品をひとまとめにし、とにかく車で近くの高台（日和山＝標高 56m）へ避難しました。早めに避難したので渋滞に巻き込まれずに山の上にたどり着くことができました。

山の上には避難者の車がたくさんありました。みんな津波が市街地を襲う状況は知らないまま、詳しい情報が分からない状態で動くこともできず、車で待機していました。

近くの避難所になっている中学校を見に行ったら、体育館はすごい人。電源の確保ができず、暖房もなく、何百人もの人達が避難して来ていて、横になるスペースもない状態でした。そんな中にはとても娘を連れては行けないと思い、一晩中車の中で過ごしたんです。

吸引器の電源は車から取りなんとか確保しましたが、ガソリンはあいにく半分しかありませんでした。エンジンを付けて暖房をとり、それでも寒かったので自宅からもってきた毛布をいっぱい掛けて寝ました。

停電に加えガソリン不足が深刻

３月 12 日。夜が明ける頃、津波の被害が大きく、家には戻れないくらいひどい状況だとわかりました。

近くにある父方の親戚（叔父）の家へ向かい、１ヶ月ほどお世話になりました。そこは津波の被害は無かったものの、ライフラインは完全に寸断されていました。吸引器は車のバッテリーから電源を確保していましたが、そのうちにガス欠になりました。その後は電気が戻るまで、足踏み式の吸引器を使い何とか乗り切りました。

その後、義母が「うちに来たら」と誘ってくれ

たので、夫の実家に避難し、３ヶ月間過ごしました。

ガソリン不足が深刻でした。自分の実家で両親の車が津波でダメになったので、ガソリンはそこから抜いて使いました。電気が来てからも 100V の電源ケーブルを自宅に忘れてきて充電できませんでした。近くに住む酸素吸入している学校の友達に相談したら、酸素業者に掛け合ってくれて、デモ機用の電源ケーブルを借りることができました。

食料については、自宅から持ち出したもので３日間はしのぎました。その後は、水、食料、医療用品等を、娘の学校の友達から分けてもらいました。薬や紙おむつは、拓桃医療療育センターの主治医が手配してくれ、酸素の業者が避難先まで届けてくれました。薬は普段は大学病院に処方してもらうのですが、当時は拓桃医療療育センターに頼りました。

その他の足りない物などは、保護者仲間やボランティア（札幌のホップ障害者地域支援センター）に届けてもらいました。たくさんの方々に助けてもらい、娘に必要な物は何とかそろい、非常時を切り抜けることができました。紙おむつについては、サイズが揃わなくて当初は困りました。救援物資で届くものは赤ちゃん用か大人用しかないからです。

仮設住宅での苦労

次に待っていたのが、「住まい」の問題でした。

自宅は津波で全壊したため、仮設住宅の入居を希望しました。３月末、市役所へ申し込みに行くと障害者は優先枠に入ると説明がありました。すぐに入居できると思い待ったのですが、抽選に８回もはずれ、入居できたのは４ヶ月後の７月でした。優先枠の範囲が広く、障害者だけでなく、高齢者と乳幼児のいる世帯も含まれ結果として倍率が高くなったようです。

この間、慣れない避難生活のためか、次女はは震災前から体重が約１割減って 22 キロになりました。

ようやくスロープ付きの仮設があたったものの、実際には玄関扉の幅が狭く車いすが通れません。南側掃きだしを使って出入りしたのですが、段差が大きくて、だっこした状態ではとても上り下りできないのです。出入りが大変だったので南側掃きだし窓にスロープを設置してもらいました。その決定が下りるのに２ヶ月かかりました。

南側窓に後付けしたスロープ

仮設住宅は市街地から離れた住宅地の中にありました。市街地に近い仮設は、早くに当たった人が入居して、後からの人は不便なところになりました。

その他に、お風呂に段差があったり、駐車場が砂利だったりと、障害者や高齢者にはとても住みにくい環境でした。改修工事もなかなか進まず、いつになるか分からない状態でした。対応の必要な件数が多く大変なのも分かるけれど、最初からきちんとバリアフリーの仮設住宅を建てていればこのような問題は起きなかったと思います。

入居してからは住みにくい問題があり。市役所には要望書を提出しました。

地域のつながりを意識的につくらないと

被災した自宅をリフォームして住む予定です（2013 年４月に入居）。2012 年中に工事が終わる予定だったのが、いろいろあって延びました。自宅に戻るといっても、不安があります。

たとえば近所とのつき合い。震災前はつき合いがあまりありませんでした。長女が地元の学校出身ならつながりができたのでしょうが、長女が小学校卒業後に引っ越してきて（５年前）、次女は特別支援学校だったので、地域とのつながりが希薄なんです。

震災前に要援護者登録はしていました。民生委員が訪ねてきたときに登録したらどうなるか尋ね

ましたが、はっきりした返事が得られませんでした。地域防災に積極的な地区ではなく、我が家も地域の避難訓練も参加していませんでした。地域支援者についても、「決める予定はない」との返事。名簿登録は形式的なもので機能するものではありませんでした。更地になって近所の人はさらに少なくなっています。

自宅周辺では、教会関係の団体がボランティアをしていて、近くの借家を拠点にして近所の人が集まる場所になっています。そこからつながることになりました。次女のことを心配して支援してもらえるようになったんです。出入りするようになってから近所の人たちともつながるようになりました。自宅の庭掃除をしてくれたりして、近くに住んでいた人と「近くにいたんだねー」と会話するようになりました。

伊勢知那子さん（本誌 117 号で紹介）のところは地域の学校に通って地元とのつながりがあったけど、わが家は意識的に作っていかないといけないんです。

近所の人とは、「また津波が来たらどうしよう」と話をしています。大街道南地区は土地区画整理事業の指定を受けていますが、戻ってくる人が多くて、区画整理が難しいらしいそうです。津波避難ビルの話も出ています。

災害から命を守る主体になる

障害当事者や家族も、できるだけ街に出るようにして、住んでいることを伝えたいですね。災害への備えはある程度自分でしておかないとダメ。避難は自分でしないとダメだと思います。近所づき合いをして、ここに住んでいるというアピールが必要です。

地域の避難訓練にも参加して、普段会わない人も避難訓練を通して出会うようにしたいです。

津波警報の発令後、高台を目指す車両で混雑した日和山周辺。2012 年 12 月 7 日午後 6 時ごろ、河北新報

今度津波が来ても、日和山までは渋滞で逃げられないと思います。2012 年 12 月の地震の時もすごい渋滞になったのです。近所のパチンコ屋「大将軍」がよいかもと考えています。立体駐車場に車のまま上がれるし、発電機もあるらしい。けれど、通りに出るまでが渋滞で出られないかも。大街道は普段から混んでいます。避難路の確保は課題です。

発災時、拠点までは物資等が集まっていました。でもその場にいない人には全く届きませんでした。特に自宅で孤立している人には物資が届きません。自宅に被害がなかった人も物資がなくて本当に困っていたんです。必要な物資を「この人」に届けるしくみが必要です。現場のニーズと支援が届く時間とにタイムラグがあります。

震災を通して、多くの方たちに助けて頂き、たくさんの出会いがありました。「被災地障がい者センターみやぎ」のみなさんとも震災後に出会い、活動が始まりました。どんな障害があっても、地域で当たり前に暮らしていけるよう、共に活動していけたらと思っています。

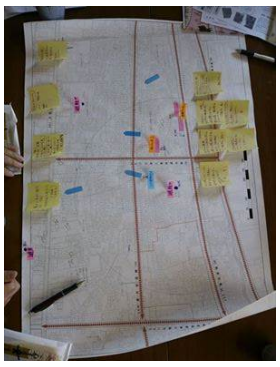
災害時に困難を抱える当事者からの発信

新田さんはその後、地元大街道地区で、障害者や高齢者を在宅介護する家族が中心となって「たんぽぽ会」を設立。自らの避難体験を踏まえ、津波避難ビルの設置や

大学の先生を招いての勉強会

災害弱者の支援について地域のなかで知恵を出し合っています。災害時に困難を抱える当事者・家族からの発信の取り組みとして注目されます。

東北大学の先生を講師に招き、誰もが安心して暮らせる地域づくりをテーマに災害弱者の避難場所や避難方法について考えるセミナーを開いたり、自宅周辺の地図を広げて避難経路や避難方法を検討する中、町内会と緊急時の避難対策を話し合っています。


地図を広げて避難経路を確認

広場でこどもの日イベントを開催

仲間たちと石巻のアーケード街を散策

在宅介護世帯、避難策探る　石巻・家族会「たんぽぽ会」設立

東日本大震災で津波被害に遭った宮城県石巻市の大街道地区で、障害者や高齢者を在宅介護する家族たちが「たんぽぽ会」を設立し、市や町内会と緊急時の避難対策を話し合っている。避難ビルの設置など、災害弱者の命を守る方法を具現化してもらおうと、今後も市などと協議を進める。

会は１月に設立。メンバーは大街道地区の住民ら約 15 人で、半数ほどが障害者や高齢者を自宅で介護する。月１回、地区の集会所などで会合を開き、市職員と意見交換もしている。

大街道地区では自宅に戻って生活再建する世帯が少なくない。しかし防潮堤や高盛り土道路が未整備なため、在宅介護世帯などで緊急時の避難場所がないことへの不安が募る。

集会所で３月中旬、石巻市職員を招いて
意見交換するたんぽぽ会のメンバー

星恵美子さん（64）は、重度の障害があり全介助の必要な長女（31）を夫婦で介護する。昨年１２月の津波注意報の発令時は、３人で自宅２階で不安な時間を過ごした。渋滞が予想されたため車での避難を諦め、避難場所までの移動も難しかったという。

星さんは「大きな津波が来ても家族だけでは娘を避難させられない。一日も早く防潮堤や避難ビルを造ってほしい」と訴える。

会長の新田理恵さん（42）は、重い意識障害の次女（14）を仮設住宅で介護する。自宅改修が終われば地区に戻る予定だが、所属する町内会は住民の多くが仮設住宅で生活していることなどから、活動休止状態。今後、たんぽぽ会の活動を通じて自宅に戻った住民と町内会の立て直しに取り組むという。

「町内会が動かないと行政はなかなか話を聞いてくれない。会と町内会が連携し、安心して暮らせる町づくりをみんなで考えていけるようにしたい」と力を込める。

（河北新報 2013 年３月 21 日）

過酷な被難生活を生き抜いた全盲のスーパーおばあちゃん

東京電力福島第一原発事故の直後、緑内障で全盲の小山田トヨさん（80）は福島県南相馬市小高区の自宅に５日間取り残されました。原発から 20km 圏内の自宅でひとり暮らしでした。

救助された後も１年半にわたり、９回もの避難と壮絶な「被難」生活を余儀なくされました。トヨさんの話からは、自力での避難が困難な災害時要援護者の課題とともに、障害者（高齢者）福祉をめぐる根本的な問題が見えてきます。

（２月 13 日南相馬市・馬越応急仮設住宅にてインタビュー）

小山田トヨさん…1932 年生。川崎市出身。1981 年 49 歳の時に、親の実家である南相馬市小高区に移住。小高区には戦時中に疎開経験あり。緑内障は母方遺伝で、53 歳で視力を失った。

「死を覚悟した」５日間

「私は目が見えないからねー。見えてりゃ裸足ででも逃げるんだけど」── ３月 11 日の震災直後、自宅の前に住む知人から「津波が来るから逃げて」と声がかかった。その知人は「原町の親戚が心配だから見にいく」と言って出かけてしまった。自宅１階の茶の間のこたつで布団をかぶり、寒さと余震に震えた。

翌日、原発が爆発。警察が「逃げてくれ」と呼びかけていた。警察は通りの裏までは入ってこられなかった。周囲の人たちのほとんどが車で逃げ、助けに戻ろうとした知人の車は警察官に制止されていたことを後で知った。

自宅は晴眼者の時から暮らしているので、針１本がどこに置いてあるかまで分かるが、新しいところは地図を描きようがない。

自宅は小高駅のすぐ近く。津波は幸い線路の土手で止まった。しかし家の近くまで津波が来たため、水が引いた後も膝くらいの高さのヘドロが自宅周囲を取り囲んだ。

広報車が来て「逃げて下さい」との呼びかけはあったが、外に出られなかった。「助けて～、助けて～」と叫んだが、届かなかった。

電気も電話も水道も止まった。水がないのが困った。水は断水になる直前に、ヤカンに確保した。あとで知人から「さすがおばちゃんだな」と言われた。この水で５日間生き延びた。

最初は即席ラーメンを食べようと灯油ストーブで作った。こんなに水を使うのはまずいと気づいた。ラーメンは１回きりにした。食パン２～３枚が残っていたのでそれをかじった。電気も水もないからご飯は炊けなかった。

トイレはお風呂の残り湯で流した。地震の前に半分は洗濯に使っていたので、半分残っていた。地震でドロドロになったところを拭いたり掃いたりした。

街中がもぬけの殻となり、一人きりで取り残された。地震後は電車や車はおろか、猫１匹通らなかった。

「やっと通じた！」

電話は通じなかったが、３月 15 日の夕方にビビビッ…と、壊れたような音で鳴った。埼玉の親戚からの電話だった。先方は毎日 100 回以上かけていたらしく、「やっと通じた！　生きていてよかった！」と言われた。

ヤカンの水でしのいでいたこと、ペットボトル

に 2cm くらいしか残っていないことを伝えた。親戚は南相馬市役所に電話して「水を届けてくれ」と言ってくれたが、「できない」と断られた。

電話が通じるようになったので、自分から 110 番をかけた。福島警察の女性が出たので事情を説明し、救助を求めた。

雪しぐれの日だった。警官が着くと「男物だがこの長靴を履きな。履かないと出られないよ」と言われた。大柄な警官に抱きかかえられるように泥と瓦礫の中を脱出した。

「トヨさん、時の人だよ」

＃1　市民文化会館　3/15
＃2　社会福祉協議会　3/15～18

警察の車で、市民文化会館ゆめはっとに向かった。ホールにはいっぱいの人がいた。音の感じからすると何百人といた。みんな寝られなくて立て膝で過ごしていた。

同行した警官が一度外に出て電話しているなと思ったら、「あんたは別のところに連れて行くから」と耳打ちされた。

すぐに社会福祉協議会へ連れて行かれた。床暖房が効いたところで、温かい雑炊が用意されていた。

社協には３～４時間前まで知的障害の人が 45 人くらい入っていたのが、ちょうど出たところで空きができた。彼らがいたら収容できなかったらしい。社協へは、自分の 110 番通報から警察と市役所が調整して入れることになった。

警官には命の恩人と感謝した。

社協に避難したところで自分のことがテレビとラジオで大きく報道された。「トヨさん、時の人だよ」「７時のニュースで今やっているよ」と言われた。５日ぶりに救助された老人として伝えられ、東京の息子たちも自分の無事を知った。

しかし、社協は 20km 圏内にあったため、「別の体育館にバスで行くように」と伝えられた。

社協の事務局長が「目の不自由な人を体育館にはやれない」と言ってくれ、埼玉の息子のところに送り届けてくれることになった。社協職員を１人つけて、自動車で送ってもらった。社協の看板をつけた車だったので、ガソリンスタンドで満タンにしてもらえ、通行規制のかかった緊急輸送道路を通ることができた。

招かれざる客

＃3　埼玉の息子宅＋ショートステイ　3/18～7/26

３月 18 日朝に出発して、夜の８時に埼玉の息子の家に着いた。

着いた時息子からは「乞食の一歩手前の格好」と言われた。避難前、一度よそ行きの服に着替えたものの、避難先で自分だけが着飾っていてはおかしいと思い、よれよれの服に着替え直していた。長靴をはいて、１週間もの間顔も洗えない、着替えも入浴もできなかったので、ばい菌扱いされた。

息子宅では折り合いが悪く、招かれざる客だった。２ヶ月間の滞在の後、できたばかりのショートステイを 40 日間ほどを利用した。

さいたま、熊谷、川越あたりで避難先施設を探したが、どこも 30 人待ちで入れなかった。

小山田トヨさんの避難先

	避難先	期間
－	自宅（南相馬市小高区）	2011/3/11～3/15
1	市民文化会館ゆめはっと	2011/3/15
2	社会福祉協議会	2011/3/15～3/18
3	埼玉の息子の家（２ヶ月） ショートステイ（埼玉県内）	2011/3/18～7/26
4	福島市・養護盲老人ホーム	2011/7/26～ 2012/6/4
5	いわき・民間借り上げ仮設	2012/6/4～7/10
6	宮城県・秋保温泉	2012/7/11～8/24
7	宮城県・中山平温泉	2012/8/24～8/26
8	宮城県・鳴子温泉郷	４～５日
9	自宅（南相馬市小高区）	５～６日
－	南相馬市馬越応急仮設住宅	2012/9/19～現在

「刑務所の方がマシ」

＃４　福島市・養護盲老人ホーム
2011/7/26~2012/6/4

福島市にある視覚障害者の施設が見つかった。病院が経営する 50 人定員の養護盲老人ホームだった。

施設には７月 26 日から翌年６月４日まで 10 ヶ月余の間過ごした。

視覚障害者の施設とはいえ、入所歴の長い認知症の老人が多かった。

「ひどかった」「居心地よくなかった」――何でもかんでも世話を焼かれ、意にそぐわなかった。

相談員に一人まともな人がいたので、自分の意向を伝え、自分は掃除も洗濯も一切一人でやった。

入浴の時、浴槽までの手引きだけを頼んだが、あとは一切自分でやった。自分で主張しないと、頭のてっぺんからつま先まで洗ってくれるところだった。

１円の金も自由にならない。保険証も年金も実印も持ち物はすべて取り上げられ、管理された。「なんだここは！？」と疑問だった。

後から分かったが、「措置入所で入ったら一生過ごすところ」と聞かされた。一生いるつもりはなかった。

「施設を出たい」と主張しても出してもらえなかった。一度入ったら簡単に出られないという説明だった。だから死にものぐるいで闘った。

６畳一間の相部屋（２人１部屋）で、すぐ手の届くところに便器があった。すぐ脇でお茶を飲んでいるようなところで、「刑務所でもこんなにひどいところはない」と訴えた。

同室者が排便で失敗した下着を便器で洗っていた。それは何とか見逃せたが、部屋の中を拭く布巾を便器で洗っていた。これは辛抱ならなかった。

育った環境が違うのだから、その人のせいではない。「合わせられない自分が悪いのだから、自分をよその部屋に変えてほしい」と訴えた。職員は、同室者に注意すると言ったが、その人が傷つくことを恐れ、それを制止した。自分の部屋を変えてもらった。

「ここにいる人ではない」

盲養護老人ホームには月 38 万円もの厚生年金がもらえる男性利用者がいた。「金があるのに、なんでこんなとこにいるんだ!?」とその人に問い詰めた。その人は「息子や娘にとられるから」「ズボン下も買えないんだ」と話した。「いいところに入れるから」と説得されて入ったらしい。「施設を出たいなら市役所に頼んだらいい」と進言した。プライドのある人だったので、「こういうときは頭を下げて頼むんだよ」と教えた。「そんなに金があるなら、６畳１間でも借りて、１日いくらで人を頼んで世話してもらったらよいのに」と勧めた。その人は年金の５～６割は利用料にもっていかれるが、残りは貯金していて何千万円とあるらしい。その資産は施設の経営者が管理している。

年金を 20 万円くらいもらっている人が大勢いた。12 万円の利用料払って、残りの８万円は施設が預かって、全体で何千万円という金額になっている。

そういう人は自分では出られない。手を引っ張ってくれる人がいないと一生出られない。そうしないと牢獄だ。

職員の中には冷静な人もいて、「小山田さんはここにいる人ではないと思っていた」と、そっと耳打ちしてくれた。親身になってくれる職員は、周りに合わせるしかなく小さくなっていた。

いわき市出身の緑内障の同室者に身内が会いに来た時に、面会者にこっそり相談した。いわき方面で出る先を探してくれるように、しかも秘密裏に進めてほしいことを頼んだ。

電話をかける時は職員がそばで立ち聞きされたので、うかつなことは喋れなかった。

まるで姥捨て山（うばすてやま）のように、見捨てられた人が入所してきていた。利用者は金づるなので、経営者は死ぬまで放さない。利用者に共通するのは、経済観念がないこと。金がないのに使わされること。自分のことしか考えない。みんな共通していた。「なるほどなぁ」とつくづく思った。社会勉強させてもらった。自分は一人ひとりの生き方をみて、こういうところを見習いたい、こういう風にはなりたくないなと研究した。

施設では 10kg もやせた。顔を合わせるとみな食べ物の話をした。粗末な食事で、腹が減ってしようがなかった。男性利用者が、「今日は鳥のエサだ」「今日は犬のエサだ」「猫のエサだ」と食事の度に話していた。夜９時に就寝だったが、腹が減って寝られなかった。せんべいを買っておいて、水を飲んでしのいだ。正月なのに餅も食べられなかった。

2012 年６月４日、ようやく出られることになった。出たいといってもなかなか出してもらえず大騒ぎになった。「外泊体験ならよい」と言われたので、「体験してきます」と６月４日に出て、そのまま退所した。でも施設の都合で６月 24 日まで籍を抜いてもらえなかった。

創立以来 20 年間で「生きたまま退所した最初のケース」と言われた。死んだら出してくれる。死ぬまで出してくれないところだった。

「話が違う！」

#5　いわき・民間借り上げ仮設
2012/6/4～7/10

入居先は看護師の元アパートだったところ。県が借り上げて原発から避難した住民を受け入れる、民間借り上げのみなし仮設住宅だった。

90 歳のばあさんが大家で、病院からアパートを買い上げて経営していた。やり手のおばあさんで、今も現役で仕事をし、食事を作って利用者に食べさせていた。

１階ではおばあさんが社長を務める会社が老人デイサービスを経営していて、日中そこを利用する決まりになっていた。入居料は無料だったが、そこを利用しないと食べさせてもらえなかった。

事前の説明では「土日は食事が出ないので自炊して下さい」とのこと。自炊が楽しみで、これで好きなものが食べられると喜んで入ったのに、実際には「ガス、水道は使わないでください」と制限された。朝８時から夕方４時まではデイサービスに強制的に行かされた。他の利用者も「入る前と話が違う」と漏らしていた。

デイサービスは認知症の高齢者ばかりで、「９＋３は？」「５＋５は？」というレベル。「なんぼなんでもこれはないだろ」――。苦痛で苦痛でしかたなかった。

村雨の露もまだひぬ槇の葉に
霧立ちのぼる秋の夕暮れ

ある時百人一首をやるというので、これならと期待した。「むらさめの～」と言うので、上の句を読んで下の句で取るのかと思ったら、知っている人は一人もいなかった。絵を見て女３点、男５点、天皇 10 点という内容でがっかりした。

自分は「知ったかぶりをしやがって」と思われ、きっと異端児だったと思う。大勢の中にいても会話が全くなく、苦痛でしかたなかった。

話が違うと訴えたが、通らなかった。夕食後の話ではみんな不満を漏らしていた。それを職員に立ち聞きされた。

みなし仮設に入っている間に、福島市の養護盲老人ホームからエリートと目される相談員がわざわざいわきまで足を運び、「小山田さん、戻ってくれ」と懇願された。片道２時間かかるところ、１ヶ月のうちに２～３回も訪ねてきた。「無理やり連れて帰るなら、車から飛び降ります！」と断った。

デイサービスの職員とは、「面接の時の話と違う」と何度も交渉した。「税金で生活しているのだから文句言うな」と言われた。一部は自己負担を支払っているし、残りは介護保険制度から出ているはずだと言い返した。

売り言葉に買い言葉から、とうとう「お金は要らないから帰れ！」と担当職員に言われた。「よーし！　売られたけんかは買ってやる！」と、次の朝、南相馬市原町の知人に頼んで出ていくことになった。

出ていく時お金だけは払うことにし、「かかった分を計算してください」と頼んだ。「担当職員が不在だから待って」と言われたが、最後まで現れなかった。迎えが来て、お金を払えないまま去った。裏の方で声はしていたので職員はいたと思うが、仮にも客に向かって「出ていけ」と言ってしまい、合わせる顔がなかったのだと思う。

「この薄い血は何ですか!?」

＃６　宮城県・秋保温泉
2012/7/11～8/24

小高区の自宅に一度戻った。２～３日片付けをしたが、水道が壊れたままで住めなかったので、知人に頼んで秋保温泉（あきう）に連れて行ってもらった。とにかく安い宿を探して１泊 6000 円というところを選んだ。

疲れが一度に出て３日間寝込んでしまった。宿の人が毎食運んでくれたが、一切食事に手をつけられなかった。温泉にも 10 日ほど浸かることができず、宿の人に心配された。

血圧の薬をもらいに医者にかかったら笑われた。「ハハハ…　この飽食の時代に、この薄い血は何ですか!?」と高笑いされた。養護盲老人ホームでも、さらにデイサービスでもやせてしまった（現在の仮設に入ってから体重は元に戻った）。

歯医者にかかり入れ歯を直してもらったが、お盆休みにも掛かり 40 数日も滞在することになった。

「目の見えぬ者は置けない」

＃７　宮城県・中山平温泉　　２日
＃８　宮城県・鳴子温泉郷　４～５日

老人休養ホームなかやま山荘（宮城県社協経営、2013 年２月で閉館）に行った。

十数年来利用してきて、何十人も仲間を連れて行ったなじみの施設だったが、経営者が替わって方針が変わっていた。「目の見えない人を一人置くことはできない」「付添がないとダメ」と言われ、２泊して出てきた。

次に秋田県新庄市にほど近い鳴子（なるご）温泉に行った。

１軒目は姥の湯。ここは段差が激しく迷路みたいになっていて、使いにくいので４～５日で出てきた。２軒目に農民の家を訪ねた。目の見えない者は置かないと言われ、１泊だけして出た。

息子に電話したら、「老人１人で泊まり歩いて何ごとだ！」と怒られた。こっちは好き好んで温泉旅行をしているのではない。少しでもお金のかからない過ごし方を考えて、6000 円の宿を選んで訪ねただけなのに。

この間の避難を手伝ってくれた知人にはお金を支払った。「受け取らない」と言われたが、それなりの金額を惜しげもなく支払った。「お金はこういうときに払わなくてどうする」と思った。

「橋の下に住むわけにも…」

＃９　南相馬市小高区・自宅
5～6日

仕方なく、住んではいけない小高区の自宅に戻ることにした。

小高区は電気は戻っていたが、水道がダメだった。飲料水は知人が届けてくれた。食料品は買ってきた。でも知人から「月曜日からは水をもって来れない」と言われた。

家の中は地震の時のまま、ガラスや物が散乱していた。人形のケースが壊れて、板の間にガラスが飛び散ったまま、足の踏み場もなかった。住めるように片付けた。一番大変だったのは冷蔵庫だった。１年半も放置してあったので、食べ物が腐って「臭いの、臭くないのって大変！」な状態だった。一人でかき出して、庭に埋めて始末した。冷蔵庫は拭いても匂いは取れなかった。小高区には家に戻れず、まだ手つかずという家が多い。

自分が自宅に戻ったことは、以前担当していたケアマネに伝わった。「小山田さんが制限区域の自宅に住んでいる！」と、市役所の職員２人が慌てて飛んできた。「命助かった！」と思った。

市役所では「80 歳のばっばが１人で住んでいる」と大事件になったと言われた。「橋の下に住むわけにいかないし」と言い返した。

市職員が訪ねてきたのは金曜日だった。「急いで探します」と約束したが、土日月の３連休を挟むことになり、「待ってください」と言われた。

連休明けの火曜日に迎えが来て、現在の仮設住宅に入ることができた。

ひとりで外出できない

＃１０　南相馬市・馬越応急仮設住宅
2012/9/19～現在

仮設住宅に入居して４ヶ月余りが経過した。隣に大きなショッピングセンターはあるが、慣れない場所ではひとりで全く出かけられないのが困る。

震災前からヘルパー（家事援助）は使っていた。買い物だけ頼んで、掃除等の家事はすべて自分がしていた。「自分では時間がかるだろうから」とか「ヘルパーのやることがなくなるからやらせてください」と言われるが、自分でできると断っている。

仮設では、ヘアカットにいくのを手伝ってくれる人がほしい。外出支援が使えないので困る。

インタビューを終えて

過酷な体験をしつつも、「いろいろな施設でいい社会勉強をさせてもらった」と語るトヨさん。「自分は生き方を研究させてもらった」と、避難体験をポジティブにとらえていたのが印象的です。

「人生は車のハンドルの切りようで決まるんだなぁ」とも。「自分でハンドルが切れないと、姥捨て山に入れられて、正月に餅も食べられなくなるんだ」という言葉は示唆に富んでいます。

「３．１１の地震でも驚かなかったよ」とトヨさん。震災や津波の恐怖と不安が迫る中、「たいしたことない」と言ってのけるのは、44 件 53 名のインタビューを通して、トヨさんと、もう１人 80 代の男性だけでした。

トヨさんは、木下藤吉郎のわらじを温めた逸話にたとえて、「若い人は下積みの苦労がないからだよ」と笑ってのけました。小３の時に習ったという「願わくば我に七難八苦を与えたまえ」という山中鹿之助が戦にいく前に月に向かって詠んだ句が、座右の銘だそうです。

読書好きなトヨさん。東京の点字図書館からもＣＤ（以前はカセット）を借りて片っ端から読んだそうです。「大菩薩峠」「橋のない川」「戦争と人間」の３冊を絶賛。司馬遼太郎も好き。吉田松陰も勉強したそうです。人は時代によって生かされたり、殺されたりするんだと切々と語りました。

自分は強運の持ち主。人相学からも自分のような、外耳より内耳の方が出ている人は強運の持ち主──。なんだそうです。

お話しをうかがいながら、でき事の日付や具体的な金額がすらすら出てくることに感心しました。80 歳で、しかも視力を失い墨字も点字も使えな

い（メモがとれない）身で、よく記憶に留められるものだと驚きの連続でした。

視力を失ってからも毎日漢字の練習をしているとのこと。就寝時、布団の中で筆順を思い出して書いていて、さんずい偏 90 字、手偏 78 字、ウかんむり 30 字を書ける（浮かぶ）そうです。

避難所は難を被る場所になりうる

避難先で次々と襲いかかる新たな困難 ──。

障害のある人の避難では、一般の人では考えられない深刻かつ皮肉な「被難」が待ち受けています。東日本大震災では、避難中に命を落とすなどの震災関連死が 2300 人にも上り、特に高齢者に集中しました（一口メモ参照）。災害特有というより、平時からある問題が、災害によって弱い人のところに集中的に現れるようです。

トヨさんの話は、福祉施設がひどすぎて、まともな人ほどいられない現実を訴えているのかもしれません。「福祉」の現場が、最も福祉でない現実。けれど制度の下では「正しい」ことをやっているのですよね。

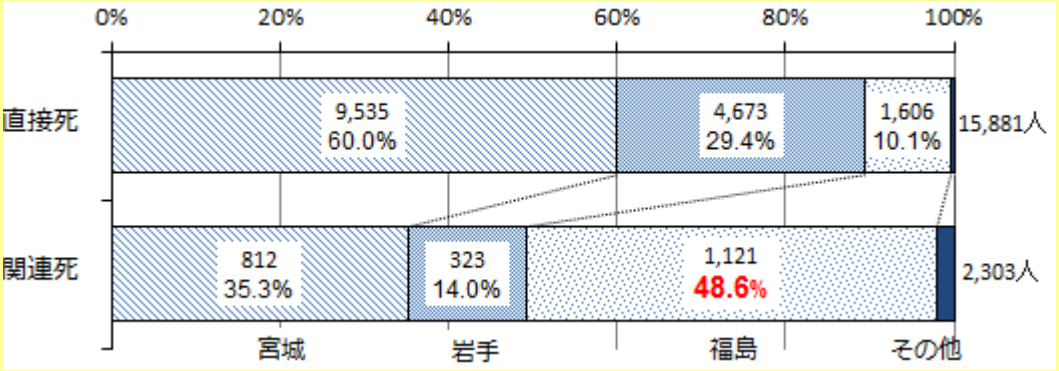
「福祉」の名の下に、埋もれて否定されて孤立して傷ついている人がどれだけいることか。トヨさんの体験は、本物の福祉は何かということを私ちに問いかけています。

声を上げられるトヨさんは逃げ出すことができ、自ら避難先を開拓してきましたが、逆に震災により安全を理由にどれだけ多くの障害者と高齢者が施設に押し込められたことか、ということを考えさせられます。

「大震災と障害者」シリーズでは、被災当事者と支援者の証言をもとに、大災害が起きた時、障害者と家族はどのような状況に置かれ、どのような支援が必要になるかを考えます。

震災関連死について

- 建物の倒壊や火災、津波など地震による直接的な被害ではなく、その後の避難生活での体調悪化や過労など間接的な原因で死亡すること。
- 2013 年 3 月 11 日現在、震災関連死は 2,303 人。
- 66 歳以上が約 9 割を占める。
- 発災から 1 か月以内が約 5 割を占める。
- 県別では、福島が 1,121 人、宮城が 812 人、岩手が 323 人。
- 直接死は宮城が 6 割を占めて最も多いが、関連死は福島が半数近くを占める。
- 南相馬市では 406 人と多く、原発事故による避難生活のストレスが原因。



地域のつながりがあればこそ

「障害を理解してくれる町内会の人たちのおかげで、避難所でも暮らしていけた」2011 年３月、石巻市立湊小学校にて

大災害が起こった時、障害者と家族はどのような状況に置かれ、どのような支援が必要になるのでしょうか。

東日本大震災で被災した宮城県石巻市の伊勢知那子さんの母親（理加）さんから、被災状況や避難生活での苦労、今後の備えなどについて、話しを聞きました。（２月 13 日、被災地障がい者センター石巻[*1] にて）

伊勢知那子さん

- 被災当時 14 歳（中２）。気管切開による痰の吸引、胃ろうによる経管栄養摂取など、医療的ケアの必要な重度の障害者。
- 地震による津波で自宅は全壊。小学校の教室の隅で車いすに乗って２ヶ月間一般の指定避難所で避難所生活を送った。
- 両親と３姉妹の５人家族の三女。主な介助者は母親。

Q. 被災状況と避難生活の状況はどのようでしたか？

発災時は自宅にいて、体験したことのない激しい揺れが収まってから、「診察券、薬のリスト‥‥」と避難の準備をしました。非常持ち出しを準備してあったのに、気が動転して忘れていたんですね。津波のことはあまり考えず、また自宅に戻れるくらいに思っていました。

主人も職場から戻ってきて、一家４人で知那子も通った湊小学校（指定避難所）へと車で避難しました。

小学校に着くと、地域の人が「２階以上に上がれ」と呼びかけており、主人が本人を抱えて、自分が吸引器２台をもって３階に駆け上がりました。主人と次女が校舎の脇に駐めた車まで、車いすと避難物資を取りに降りたところ、津波が襲うのが３階の窓から見えました。「２人は助からない！」と観念しましたが、間一髪で無事でした。「想定外」というけれど、現実がそうでした。

2011/3/22 湊小学校

校庭は津波にのまれ、せっかく準備した避難物資も車も流されました。車いすだけは主人が身体を張って無事でしたが、食事と薬関係は全部車に残ったまま。避難開始時のタイムロスを悔やみました。

Q. 避難生活はどんな様子？

教室の３分の１ほどの広さの相談室で、23 人の共同生活が始まりました。当初は毛布もなく、校舎のカーテンや運動会で使う大漁旗にくるまって寒さをしのぎ、周りの人が知那子に多めに分けてくれました。

３日間は、電源がない、水もない、食料もない、何もない状態です。２日目に主人が津波に呑まれた自宅にエンシュア（経管栄養剤）を取りに戻り、泥まみれなのを注射用蒸留水でゆすいで使いました。他に与えるものがありませんでした。

痰の吸引には電源が必要なので、停電が最も困りました。

初日は自衛隊も動けず、２日目にヘリコプターが動き出した時、石巻赤十字病院に頼るしかない

と考えました。しかし命に関わる重傷者が多くて、知那子の搬送許可はなかなか下りません。病気ではないけれど、電源がないと命をつなげないということを、在学中お世話になった学校の先生も一緒に声を上げてくれて、３日目にようやく病院に搬送されました。吸引器はあるけれどバッテリーがないこと、経管栄養であることを伝えました。

知那子が病院に行って安心したのもつかの間、心配だった実家を見舞い避難所に戻ったら、なんと知那子が緑色のトリアージタグ*2 をつけて戻っていました。脱水症状を解消するための点滴をうってもらっただけで、充電も経管栄養剤ももらえず帰されたのです。病院は重傷者であふれ、医療的ケアの必要な知那子ですら避難できる場所ではなかったのです。「どうにかしなきゃ」と、歩いて行ける保健センターと医師会にかけあってもだめ。「じゃあどこへ逃げればよいの？」という気持ちでした。この子たちが避難できる場所ではないんだと悟りました。

2011/3/13 石巻赤十字病院

バッテリーの電源は３日間もちました。機械トラブルに備えて、普段からポータブルの吸引器を２台準備していたのが幸いしました。

５日目に避難所の対岸にある日和山地区に電気が戻り、日和山の知人がバッテリーの充電のため避難所との間を何往復もしてくれました。

７日目、同室の人が仙台に行くというので、胃ろうの管理をしてもらっていた仙台赤十字病院に宛てて窮状を訴える手紙を書き、託しました。在宅の視点もあるドクターだったのですが、病院として届ける術がなかったようです。経管栄養剤と抗てんかん薬を処方してくれて、手紙を託した人に翌朝届けてもらいました。

８日目、避難所にもようやく電気が戻りました。

Q. 避難所に行っても孤独ではなかった？

我が家の場合、知那子も居住地の小、中学校に通い、隣近所や地域の方々と学校行事や子供会行事で接することが多かったため、障害に対する理解が浸透していました。家族単位で地域の中で過ごしてきて、家族の生き方が知られていたことは強みでした。

避難所に入った時に、最も弱い立場、はかなげな命のことを守らなきゃということをみんなが思ってくれたのです。「障害だから〇〇へ行きなさい」ということを言われませんでした。「行けと言われてもこの夫婦は行かないだろう」と思われていたんでしょうけど（笑）。

家族を切り離したくない。そんな思いでした。当時長女は３月頭に高校を卒業したばかり、次女は高１でした。

Q. 地域の小学校へ入学したのは？

地域の小学校に上がる際、２つの追い風がありました。当時宮城県知事が浅野士郎さんで、共に学ぶ教育（統合教育）を自身が楯になって進めていました。行政判断なので大きかったのと、もう一つ、障害のある子も普通学級へということをサポートしている団体、障碍児と共に歩む会との関わりがあったことです。１人で行政（就学指導委員会）と対峙するわけではありませんでした。

一方で、「この子何を勉強するの」とか「お姉ちゃんたち虐められるよ」と逆風があったのも事実です。だけど「虐められたら指導するのが仕事ではないの」「障害のこと理解してもらうチャンス」と考えました。

支援学校も施設も、当時の私たちにはもやもやベールに包まれているように感じました。特別な

環境で保護されて地域に開かれていない感じです。「障害がある子だから」とあきらめず、もやもや感がない人生を歩ませたいと思うのです。言語はないけれど、その子なりの意思表示を感じてもらいたいし、それが姉たちのためにもなると思いました。

知那子は低酸素脳症による後遺障害でした。もともと咀嚼と嚥下が上手くいかない子で、１歳直前、練習中に喉に詰まらせて心肺停止にまでなりました。人工呼吸器を付けて、このままどうなっちゃうんだろうという状況だったのが、自発呼吸をはじめました。目を覚ましてくれた時は、もう一度私たちのところに生まれてきてくれたと、家族で喜びました。

こういう子たちはどういう生き方をしているんだろうと、卒後の入所施設をたくさんみました。施設をみる度に２人ともショックを受けて帰ってきました。あまりにも閉鎖的だったのです。

姉たちと切り離さずに一緒に育てていきたい。学校の話題、学芸会や子供会、芋煮会といった共通の話題が家庭内にあった方がよいに決まっています。地域でも共通の話題があると、避難所でも共通の話題につながりました。学校を通して地域とつながる。その後の人生の地盤を作ることが大事だと感じます。

自宅が流されて、福祉の整っている仙台にいこうかなとも考えました。新しい土地で友達ができるかなという不安があり、この土地の繋がりはかけがえのないものと考え、とどまりました。知那子を通したコミュニティ、母親のコミュニティもあり、それらはいいことばかりではないが、繋がりがあることによってこの先の生き方も楽になりますから。

Q. 地域のつながりがあればこそですね？

避難所には５月まで２ヶ月過ごしました。

避難所の同じ部屋の住民は普段から付き合いのある町内会の人たちで、障害への理解もあり、深夜のたん吸引の音にも嫌な顔をしませんでした。

2011/3/23
湊小学校

モノはないけれど居心地は悪くなかったんですよ。近所の人とのコミュニティがあり、情報もありました。「近所の〇〇さんも家を壊すんだって」という話も、離れてしまうと入ってこないので不安になるし。

あとから聞いた話では、障害者やその家族が、日頃から地域の住民とのかかわりが薄く、避難所へ行くことをためらったり、避難所での生活を継続できなかったりしたケースもあったとのこと。私たち当事者が、地域への理解を広める努力をしていく必要があると感じます。

一方で、次女の高校が始まりました。湊小学校の避難所では仮設風呂を新潟のボランティアが造ってくれ入ることができたのですが、次女が部活を終えて 20 時に帰ってくると風呂に入れない。そこでライフラインが戻っていた実家に移ることにしました。

そのうちにバリアフリーの仮設住宅があたると思っていたのですが、抽選で外れ続けました。ちらほら当たった人から聞くと、バリアフリーといってもスロープが付いているだけ。市との交渉を進めつつ、８月末頃に知人のつてで民間の一軒家を借り上げた仮設住宅（みなし仮設）に入ることを決めました。自宅からは５km と離れるけど、実家に近いところでした。

Q. 津波、地震への備えは？

北上川から上がったところに自宅があったのですが、周囲の家がなくなってから、すぐそこは河口だったということが分かりました。1960 年のチリ津波の経験から「大丈夫、来ても膝くらいだから」という話もあって、油断していました。

地域医療の中核である赤十字病院でなぜエンシュアとかがもらえないのかとも考えたが、一般診

療はストップして混乱していました。病院は駆け込み寺ではなかった。災害時にも対応できる在宅医療について声を上げていかないとだめだと実感しました。

地震への心構えと、停電への警戒はあったつもり。だけど津波に関して危機意識が薄かったのは事実です。避難所で２昼夜くらい過ごせるものを用意していたが、とてつもなく恐ろしい揺れに会うと用意していたことすら忘れてしまいました。家庭でも繰り返しの訓練は必要だと痛感します。

避難生活を体験してみて、診察券番号、医療情報、薬リスト、通帳番号などが必要だと気づきました。あわてていると、いつも飲んでいる薬を聞かれても出てきません。携帯だけは肌身離さないので、発災後、携帯にいろいろな情報を入れるようにしました。津波で全部持って行かれると大変。色々な情報を一括して管理しておかないとだめです。

私たちの場合、避難する時、自宅に戻れるという前提で考えていました。でも災害はどのような状況で起きるか判らない。地震のあと津波がなくても、火災により燃えてしまうということもあり得ました。自宅に戻れなくても２昼夜過ごせるものを準備しておくべきです。

宮城県沖地震の発生確率が上がったと聞くと、あれだけの津波を経験しても、何を備えようかとあわてます。何を準備したらこの子の命をつなげるのだろう。東海・東南海・南海地震も備えないとだめ。

Q. 被災障害者の駆け込むところがない？

実は、仙台に来ないかとの誘いもあったのです。仙台赤十字病院の小児外科の医師や、拓桃医療療育センターの医師から、「ベッドを空けられるよ」と勧められました。けれど、石巻とは 70km も離れ移動手段がなく往き来が難しい。何もない時期だったので石巻に家族を残していくことへの心配や、余震活動も活発だったのでこのまま会えなくなるかも知れないという不安から、家族が離れて生活することはできませんでした。

市が設置した福祉避難所は完成度が低く、介護保険モデルで作られ、高齢者向けでした。石巻では福祉避難所は市営の小さな施設に後付けで設置されました。ある知的障害者たちの場合、「一般避難所では障害者はみられない」と言われ、石巻赤十字病院に搬送されました。病院にしてみれば彼らは「健康」。「お帰りください」と言われても、帰るところがないから、そういう「訳あり」の人が病院の廊下にあふれていたんです。

知的障害者の入所更生施設ひたかみ園の場合、周囲の被害はひどかったが、そこだけは水害はない浮島でした。ヘリが来て助けてくれると思ったら、逆によその知的障害者が下ろされたのです。

一方、通所系施設には登録している人が集まってしまってパンク状態。入所施設も通所施設も駆け込み寺ではありません。普段福祉サービスを利用していない在宅障害者や学齢期の障害児に手が回らないのが現状。どうしたらよいのでしょうか。

命は自分たちで守ろうという覚悟は、在宅を選んだ以上、自分たちにあります。そこへの全国的広域的支援のネットワークがどうにかしてできないものでしょうか。

AJU が届けたカテーテル、紙おむつ、経管栄養剤、滅菌精製水

Q. どうやって命と当面の生活をつなげばよい？

我が家の場合、物資はＡＪＵ自立の家（名古屋）、移送はホップ障害者地域支援センター（札幌）といったぐあいに、見ず知らずの団体に助けられました。１団体に頼るのではなく、「在宅のこういう人がいます」「こういう支援が必要です」ということを、どこかで対応してもらえる仕掛があるとよいと思います。

こういう情報は、市に尋ねても教えてくれません。行政も大打撃を受けて個別支援に手が回らないからです。とはいえ、一斉公平画一という立場は判るが、公平におにぎりを分けられても、この子たちは命つなげられないし…。いくら在宅障害者同士つながっていても、大規模で広範囲な災害の時には地元だけでは限界があります。

我が家の場合は幸い、日頃から交流のある県内外の方々から、たくさんの食料や生活用品が届けられました。お金をもっていても買えない時だから、大きな救いでした。だから知那子を訪ねてきてくれた支援者には、「避難所に入らなかった○○さんに届けてほしい」とお願いしました。支援者からは「こんな人は珍しい！」と言われました（笑）。

津波を経験した石巻でさえ未だ解決できていません。必要性は感じていても、まだ答えが見つからないのが実情ですね。今また地震が来たら同じことを繰り返してしまんだろうなぁ。公的な指定避難所で備蓄してくれと言っても、コストとリスクがかかりすぎて現実的ではないだろうし…。

障害当事者の側も受け身だけでは助からないよと伝えたいけれど、地元では身内を失った人などがいて、まだ傷が大きくて言えません。

在宅者には必需品のストックが必ずあります。４月にＮＨＫの「福祉ネットワーク」という番組で取り上げてもらったおかげで、全国から我が家には吸引チューブがたくさん届きました。「ここにはこういうストックがあります」「ここに必要な人がいます」ということを検索できたり、とりまとめたりする機能があるとよいと思います。

だけど被災地には運ぶ手段がなく、輸送の問題が残ります。当事者団体の繋がりで、民間の力で届けられないかな。

団体に所属していると何らかの支援が届きます。安否確認してくれるし、特別な支援が必要な人には対策になります。より多くつながっていることが重要だと思います。最後は人的な支援が頼りになると思います。

感想

インタビューからは、今後私たちが考えなければならないさまざまな課題が見えてきました。

地域の災害リスクの認識や、障害当事者・家族の災害への備え、特に身体で覚える避難訓練の必要性、日頃の地域やさまざまな団体との繋がりの重要性、救援物資の個別輸送の手立て、広域の支援ネットワーク、バリアフリー仮設住宅の標準化などです。

伊勢さん一家は困っていること発信できる力があり、関係を結ぶ力があったのだと思います。たまたまあったのではなく、地域で生きることを望み、地域で生きる苦労を日頃から引き受けてきた営みがあったからこそ、周りの人も理解してくれたのではないでしょうか。

弱さの情報発信と普段からの地域との繋がりがいざという時に底力となります。インクルーシブな社会の実現。教育だけではなく、地域防災の観点でも重要だし、急がれると改めて感じました。

＊　　＊

大災害により日常を支えるあらゆるものが失われた時、最後の頼みは直接的対面的な人による支援である。当たり前なのだけど、あらためて実感しました。

災害時、より弱い人に問題が端的に表れます。医療的ケアの必要な重度の障害者と家族の被災体験は、災害時の支援のあり方を私たちに教えてくれたと思います。

「何を」支援するかではなく、「誰を」支援するかへの発想の転換が必要です。

災害時の支援を考える人たちは、何を支援するかと機能的に考えがちです。「何を」から発想されたのが、寝る場所としての避難所、食料と水、毛布、仮設トイレと風呂、瓦礫撤去、泥かき…、こ

れらは機能的に考えて誰もが思いつくことです。言い方を変えると大量、一斉、公平、画一の支援が中心でした。これらの支援だけでははじき出されてしまう人がいます。

そうではなくて、問題を抱えている「この人」を特定して、何が必要かを考えること。困難を抱えた人それぞれに支援ニーズはさまざまであるし、混沌とした状況の中、ニーズ自体も流動的となります。地元だけでは解決しない課題も多く、外部から支援を結びつけなければなりません。

被災者や障害当事者も支援を受けるだけではなく、地元ならでは、当事者ならではの視点で支援を担うことが大事なのではないでしょうか。そんな支援の舞台づくりが急がれます。

東日本大震災は決して東北だけの話ではありません。南海トラフによる巨大地震、活断層による直下型地震、スーパー伊勢湾台風…。わが街の災害対策を当事者も参加で早急に見直さなければなりません。

注1 被災地障がい者センター石巻

被災地の障害者支援を目的に 2011 年 10 月設立。今では地域福祉に軸足を移して活動中。障害当事者を中心に、地域の中で自立した生活が営めるよう様々な活動を通じて支援している。

http://blog.canpan.info/hsc_ishinomaki

住所　宮城県石巻市蛇田字中埣 37

電話　0225-25-5388

注2 トリアージタグ

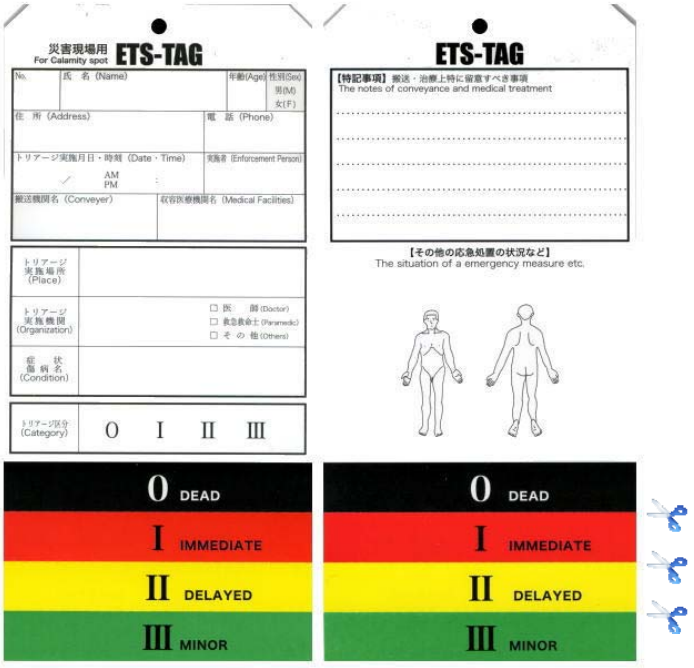
トリアージ（Triage）は、災害医療において、最善の救命効果を得るために、多数の傷病者を重症度と緊急性によって分別し、治療の優先度を決定すること。タグの色によって以下のように分類される。

黒…カテゴリーO（死亡群）
死亡、または、生命徴候がなく救命の見込みがないもの。

赤…カテゴリーI（最優先治療群）
生命に関わる重篤な状態で一刻も早い処置をすべきもの。

黄…カテゴリーII（待機的治療群）
赤ほどではないが、早期に処置をすべきもの。

緑…カテゴリーIII（保留群）
今すぐの処置や搬送の必要ないもの。完全に治療が不要なものも含む。



（表面）　（裏面）

CIL たすけっと井上朝子さんに聞く

大震災と障害者の被災体験

５月４日午後、仙台の CIL たすけっとを訪ね、事務局長の井上朝子（ともこ）さんと、スタッフ菊池さんから、発災当時の様子や、その後の被災障害者への支援の状況などをうかがいました。

（みずたに）

避難所へ避難したものの

震災当日の夕方、たすけっとの利用者はそれぞれ自宅近くの指定避難所に向かった。発災直後に健常者スタッフが利用者宅を１軒１軒自転車でまわり、１箇所の避難所に固まると大変だろうと、最寄りの避難所への避難を呼びかけた。

井上さんの避難所＝長町小学校には、すでに 1000 人近くの住民が避難してきていて体育館は埋め尽くされていた。一度入ってしまうと動けない。方向転換すらままならず、誰かにぶつかる心配があった。別の校舎にある障害者用トイレに行くため体育館から出ることもできないし、体育館内のトイレも大行列であった。余震も続いた。

日が暮れて寒くなった。当日は地震直後に雪が降った。「並の雪ではなくて、バケツをひっくり返したような大粒の雪」。それまですごく晴れていたのに、「見たことのない雪」だった。いきなり寒くなった。避難所にいるよりは事務所に戻った方がよいと判断し、真っ暗な中を懐中電灯で照らしながら、何とか体育館から出た。事務所から迎えに来た車に乗って事務所に向かった。

スタッフは他の避難所も回った。どこも一般の避難者が先に入り込んでいて、トイレは使えないし、事務所の方がよいと思った。結局、たすけっとにはヘルパーも入れて 15 人ほど集まった。

井上朝子さんとＣＩＬたすけっと

井上さんは岩手県二戸市出身。青森に近かったので、八戸市の養護学校へ越境（越県）入学、施設で 12 年間過ごした。自立生活運動には、自分より両親らが興味を持っていた。父母会主催でマイケルウィンターや安積遊歩さんらを呼んで講演会を開いていた。小さい頃から連れ回されていたが、当時は興味なく、むしろプレッシャーに感じていた。中学校の時、一人暮らししている先輩がいて、初めて興味を持った。調べていったらいつの間にか自分も自立生活運動に入っていた。

CIL 盛岡ができるのと、自分の高校卒業が同時期だった。在学中は CIL 盛岡がなかったので、岩手で生活するよりは仙台に来てしまった方がよいと思った。仙台は学生が多いし、雪は少なく、交通の便がよかったから。支援費制度が始まる 2003 年のことだった。

当時二戸市からは 125 時間しか出なくて、世帯分離のために奔走した。当初は大学進学の建前だったので、大学生が世帯分離するなんてとんでもないと役所から言われて、結構闘った。そうこうしているうちに、たすけっとに雇ってもらえることになった。

現在、たすけっとの事務局スタッフは健常者、障害者 5 名ずつ、合わせて 10 名。井上さんは事務局長。代表の及川さんは言語障害を伴う重度の脳性まひで、東北福祉大学を卒業して社会福祉士を取得した。一人暮らしを始めたのは井上さんの方が先だった。たすけっとは、元もとボランティア団体として８年程活動していたが、2003 年支援費スタートによりヘルパー事業所。井上さんは第１号利用者。

発電機でラジオを聞き、携帯を充電した。携帯はつながらなかった。PHS の方が強くて、Willcom が一番早く３日目くらいにつながった。au や softbank はつながらなかった。被災地の方が逆に情報が入らない。

障害者の生活を直撃

発災当初、ヘルパー自身が被災して自宅から出ることが難しかった。車で来ているヘルパーが多いことからガソリン不足による移動制約、加えて家族の中に幼少の子どもや高齢家族がいるため普段通り働けない人が多かった。震災から２週間くらいは毎日がスクランブルで、正職に不休で頑張ってもらった。それでも手が足りなくて、利用者２名に対して１名のスタッフで対応することがあった。自宅の掛け持ちは難しいため、メンバーにも事務所に来てもらい、３日ほど一緒に寝泊まりした。事務所の床の上に布団を敷いて寝た。女性は奥の相談室に。

たすけっとのカベや床には地震による亀裂ができ、耐震診断を受けるまでは倒壊の恐れがあった。「少人数に分かれて避難しよう」と決め、３次避難を開始した。井上さんたちは児童館に避難し、そこが閉鎖されるまでの３日間ほどを過ごした。「発災以来スタッフは今も不休で働き続けており、倒れるのではないかと心配」と井上さん。

自宅には戻ったものの

井上さんの自宅はマンションの９階。エレベータが動かず、震災から１週間ほど自宅に戻れなかった。岩手の実家から親が出てきて、実家に戻れという話すら出た。

３月 11 日の本震の時はたすけっとの事務所に、

３月 21 日自宅にて

４月７日の余震の時は自宅にいて、翌８日にヘルパーに負ぶわれて降りてきた。「閉じ込められるのは怖いし、ヘルパーと一緒にいても怖かった」「９階なので余計に揺れた。車いすのタイヤがバコバコ浮いてしまって、倒れるのではないかと思った」。

本震よりも余震で倒れる家も多かった。土留めしているところが割れているところがあり、「これから雨の時期で地盤が緩んで心配」という。

余震も続いて怖いので今のマンションから引っ越ししようかと考えているが、家を失った人優先のため、なかなか物件が見つからない。

被災地障害者支援

本震翌日から CIL たすけっとは被災者の訪問を開始。在宅障害者の安否確認と救援物資の届けた。また、たすけっとを拠点として、「被災地障がい者センターみやぎ」の救援ボランティアが活動を展開している。女川町や石巻市の現場にも行っているが、潮位を調べていかないと帰って来れなくなる。先日も潮位を忘れていて、30cm つかりながら慌てて帰ってきた人がいる。地盤沈下に加えて堤防が壊れて大変とのこと。

津波の影響で１階は流されても建物は建っていて２階に住み続けている人たちがいる。その中には障害者もいる。現在も調査しているが、情報を掴むのが難しい。

在宅障害者の中には、知的の人で、震災以来パニックになり、未だに自宅に戻れない車中生活の人がいる。精神の人は比較的平気な様子だが、地震よりも作業所が再開できず日中活動の場を失った影響が大きかった。

ある作業所では避難中にメンバーが１人はぐれていなくなった。油が浮かぶ真っ暗な水の中を、スタッフが必死に捜索した。「もう浮いているかも知れない」。水の中に手を突っ込んで、死体ではないかと思われるモノを掴んでは探し回った。翌日になって、水の中に孤立した避難所のようなところに避難していた一群が自衛隊によって見つかり、

無事その中にいることが分かった。

トイレが困難な人がいて、避難所にポータブルトイレを導入した。役所の決済を待っていたら１週間かかるため、たすけっとから急きょ届けた。ポータブルトイレは入れたものの、内開き扉が引っかかるので「外開きに直したらよい」と提案。ちょうつがいを直すのに決済が必要で、結局１週間かかったらしい。行政のやることは、時間がかかりすぎ、必要な支援がその時その場で届かない。

停電中の地域にはエアーマットを使えない障害者がいた。発電機を探しまくって届けた。

義足を津波で流されて歩けなくなった人の場合、それまでは自分で歩いて排泄していたのができなくなった。被災した自宅の２階に住んでいて、今も横になっている。義足の申請をしているが２ヶ月先になるとのこと。比較的軽度な人でも、震災により困難が増しているという情報が入ってくる。

家族介護中心だった在宅障害者からの SOS が増えるなど、震災前からの問題が顕在化。「弱い人に負担がかかるシステムの矛盾を社会に訴えたい」と井上さんらは話す。

安否確認

５月４日現在、行政による安否確認や障害者の追跡調査はまだなされていない。石巻市では、GW明けからＪＤＦ（日本障害者フォーラム）と協力して専門調査員による安否確認と個別ニーズ調査が行われる。認定調査やサービス受給者名簿を中心に、役所の要援護者名簿の開示を受けて実施。困難を抱えている軽度の知的の人や手帳をもっていない精神の人もいて、名簿から漏れてしまうことが心配。

関わった方がよいと紹介されて本人の元に行っても、ご本人からは「迷惑だ」という場合もある。被災地障がい者センターの名前に「障がい者」が入っているだけでも不快だという人もいて難しい。近所の人から「大変そうだから行ってあげて」と言われて出かけても、「私は障害者じゃない」と否定されると仕方ない。

石巻市に要援護者情報を聞きにいったが、個人情報保護を理由に開示してもらえなかった。市では津波被害にあったが２階に住み続けている人を把握しており、医療チームによる健康調査を実施している。すぐにでも入院が必要な重篤な人も見つかった。名簿はある。医師は権威があるから入りやすい。ＪＤＦも国から協力するようにとのお墨付きがあるので入れるらしい。

名取市社協からの要請はあるが、たすけっとのスタッフを常時差し向けるのは難しい。支援としては長くなるので、外部からの応援を期待。支援ニーズを掘り起こしても、支援につなげられなくてはいけない。

全国の当事者に来てほしい

物資が集まりやすいということで、障害者向けの物資提供を始めたが予定が狂った。広告を打ったものの物資は集まらず、問い合わせの電話が鳴りっぱなしになり、スタッフが仙台市内の拠点をかけずり回った。どうしようという時にAJU からの 10 トントラックが来て助かった。

重度の若い障害者による訪問を打診したところ、是非見に来てほしいとのこと。

CIL たすけっと

〒982-0011 仙台市太白区長町 1-6-1
TEL022-248-6054/FAX022-248-6016
http://blog.canpan.info/tasuketto/

※7 月 16 日、代表の及川さんを名古屋にお呼びし、災害時要援護者避難支援セミナーで体験を語ってもらいます。

北海道べてるの家に学ぶ地域防災

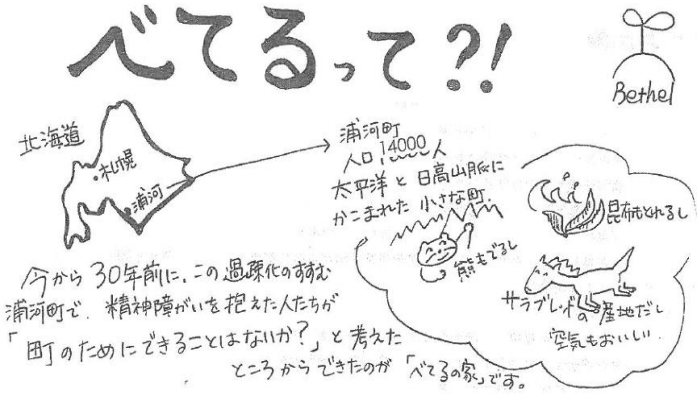
みなさんは、べてるの家というのをご存じですか。北海道浦河町にある精神障害等をかかえた当事者の地域活動拠点で、当事者の社会参加を支える支援プログラムや、投薬量が全国平均の３分の１、病床数の削減など、その先進的でユニークな取り組みが注目を集めています。

浦河町といえば、日高昆布や競馬馬の産地として有名ですが、もう一つ、十勝沖地震をはじめとする大きな地震を幾度も経験し、町民の防災意識が高いのが特徴です。

10 月に浦河町とべてるの家を訪ね、地域防災の取り組みを聞いてきましたので紹介します。　　（イラストはべてるの家・鈴木裕子さん）

当事者活動から始まったべてるの家

べてるの家（以下、べてる）の活動はとてもユニークだ。78 年、現理事長である佐々木實さんの退院祝いで焼き肉屋に集まった仲間たちが、町のためにできることを話し合ったのがきっかけで始まった。当事者活動として「ドングリ倶楽部」を立ち上げ、当初から、商売と病気体験の発信を活動の柱にした。浦河の特産である日高昆布を商売にしよう、過疎化や産業の衰退といった地域の抱える苦労への参加をめざそう、障害者としてではなく、人間として当たり前の苦労を取り戻そうと活動してきた。98 年有限会社福祉ショップべてるを設立。03 年社会福祉法人「浦河べてるの家」設立。02 年に日赤の精神病床数が 120 から 60 床に削減されたのを機に、退院した仲間が安心して住める場所として住居の確保が進められ、町の中に点々とできていった。



べてるの理念に「手を動かすより口を動かせ」というのがある。作業することも大切だが、作業しながら好きな音楽聞いて、みんなとワイワイ話することを大切にしている。朝ミーティングで体調や気分を毎朝報告。17:00 までが開所時間だが、15:00 頃まで働く。

べてるでは、当事者が理事長や社長の職を担っている。１人１起業という目標の中、07 年にＮＰＯセルフサポートセンター浦河を発足させ、当事者同士の助け合いの関係をつくっていった。「助ける人」「助けられる人」という一方的な関係ではなくて、お互いに助けたり、助けられたりという関係を 30 年間大事にしてきた。

べてるには「非援助論」という考え方がある。誰かを助けることについて、その人から苦労を取り除いたらよい人かといったら、必ずしもそうではない。人は誰しも生きていく中で当たり前に苦労をするもの。だから、精神障害者に対して何をするかではなくて、何をしないか、つまり当事者の持つ力を大事にし、当事者主体を貫いてきた。例えば、幻聴さんで苦労している仲間が、幻聴さんよりも住居に住んでいる仲間関係を通して、現実的な苦労が生まれてきたりする。

べてると津波防災

年	名称・震源地	マグニチュード	震度
1952	十勝沖地震	8.1	5
1968	十勝沖地震	7.9	5
1968	浦河沖地震	6.8	5
1970	日高山脈南部地震	6.7	5
1971	襟裳岬南方沖	7.0	5
1974	苫小牧沖地震	6.4	5
1981	浦河沖地震	7.1	5
1982	昭和 57 年浦河沖地震	7.1	6
1993	平成５年十勝沖地震	7.5	5
1994	三陸はるか沖地震	7.5	5
2003	平成 15 年十勝沖地震	8.0	6 弱

浦川町は地震が多いところだ。03 年の十勝沖地震では震度６弱の揺れとともに、1.3m の津波を観測した。海沿いの住居が多く、目の前が海というところもある。十勝沖地震の時には、幻聴さんに「逃げるな」と言われて、海岸沿いに住んでいた仲間が逃げられないとうことがあった。そこから「幻聴さんも一緒に逃げよう」と言うことをキャッチフレーズにして、避難の練習をしてきた。睡眠導入剤を飲んでいる仲間の場合、眠くて本当に起きられない。そういう仲間を誰が起こすか役割を決めて練習した。

べてるには「三度の飯よりミーティング」という理念があるが、避難訓練した後にも振り返りミーティングをして、よかった点と、苦労した点、さらによくする点を指摘し合った。実際眠っている仲間がいたときに、「彼を起こす役が必要だね」と確認し、「誰が起こすか」などを決めてきた。

以来、夏冬２回、昼と夜、雨天時、凍結時など様々な場面を想定した避難訓練を実施してきた。避難訓練をするのは共同住居１０数カ所と、ニューべてる、セミナーハウス、カフェぶらぶら、といった町内に点在する活動拠点。それぞれから最寄りの避難所をめざして避難する。夏冬で気候差があり、夏にできたことが冬はもっと大変なので、敢えて条件を変えて練習してきた。そんな中で、車いすを引っ張るのにロープが必要などと気づきがあった、という。

頭で理解して体で覚える

ちょうどその頃、国立障害者リハビリテーションセンター研究所（国リハ）が地域防災の研究フィールドを探していた。その時に国リハの担当者がべてるの当事者の講演を聴いて、「ここだ！」と直感した。しかも、浦河では大きな地震を経験しながら、死者や火事を出したことがないことにも興味を持った。

04 度より、国リハの指導の下、べてるでは避難マニュアルを作ったり、防災プログラムを開発した。過去の津波のデータから「４分間で 10m の高台へ」という具体的目標を設定した。

精神障害を持つ人たちは、幻聴さん、お客さん（頭の中のマイナス的な自動思考）に苦労していることが多いため、分かりやすいマニュアルが必要だった。DAISY（デイジー）というデジタル録音機器が、しゃべる内容を黄色くテロップで強調

DAISY（デイジー）マニュアル

表示してくれるので、認知に障害があっても視覚と聴覚に訴えてわかりやすい、ということから採用された。

DAISY マニュアルは、国リハに作り方を教えてもらい、メンバーが中心になって作った。住居ごと、活動拠点ごとに、避難経路の写真を取り込み、メンバーが吹き込んだ音声とテキストでつなげていった。2007 年に制作して 2009 に修正した。避難訓練と同様に夏冬２バージョンを作った。練習をしていけば大丈夫、幻聴さんも一緒に逃げようと DAISY を使い避難訓練を実施した。

DAISY マニュアルは、声に合わせて文字の色が黄色に変わるので、見ていて分かりやすい。場面に合わせて実際の映像が出て「次の信号を右です」などとガイドしてくれるので臨場感がある。防災だけではなく、仕事のマニュアルなども作成して日常的に活用しているという。

べてるは学習集団だ

つながり持てないようなタイプの人たちがどうしていったらよいか、よく勉強している。浦河では、当事者にも役割が与えられる。障害者だからと看られるとか、守られるだけではない。そこに浦河町民が加わっていった。その辺が他の町にはない特徴だろう。（浦河町企画課長　浅野浩嗣さん）

自治会の防災訓練に参加

十数カ所の共同住宅とグループホームには、それぞれの等高線の入った避難マップを張り出してある。またリュックに避難グッズをいれて備蓄している。避難に際しては役割を分担して、誰が持っていくとか、誰が誰を起こすとか、誰が一緒に逃げるとかを事前に決めている。避難所に薬を忘れていく人がいるので、個人のリュックに薬を入れておくことを決めている。

べてる独自の避難訓練のほかに、地域の人との合同訓練にも積極的に取り組んでいる。東町自治会とは冬に宿泊訓練を実施したり、消火訓練、炊き出し訓練も行った。

東町の人とは、津波ではない水害を前提とした訓練も行った。東町には低地を流れ海に注ぐ川があるので、海水面が高くなったら川が氾濫するし、東町は地盤がよくなくてよく揺れる。最初は地図で確認した。事前準備の上で避難訓練を行った。

避難中には、例えば先頭と最後尾とでトランシーバで連絡をとって訓練をした。トランシーバは５台あり、遠隔地とスタッフ同士で連絡をとりあった。

本当に津波が来た！

2010 年２月 28 日のチリ津波では、浦河町 800 世帯 17,000 人に避難勧告が出て、べてるのメンバー・スタッフも避難所へ迅速に避難した。

避難を開始した際、町中から車がいなくなるのが分かったという。べてるでは、スタッフ同士が携帯等で連絡を取り合って、「〇〇さんが歩いているのを見た」とか「〇〇地区の〇〇さんがいない」という連絡を受けて、車で捜しに行ったりした。

避難所では、12 時から 20 時頃まで、８時間程過ごした。避難はできたものの、いろんな人がいる中で何時間も過ごすのが大変だった。避難訓練とは違った苦労、特に見知らぬ人が大勢が避難した際の大変さを改めて実感した。

特に、幻聴さんやマイナスのお客さん抱えている人にとってはかなりのストレスになった。また、おしゃべりして過ごせる女性陣はまだよかったが、男性陣が時間を持て余してしまったという。おしゃべりの大切さや、i-pod（携帯型デジタル音楽プレイヤー）があるといいねとか、避難体験して実感した。寒かったらアルミシートが必要だとか、水を常備しておいた方がよいとかを話し合った。

２月 28 日チリ津波の時の避難所

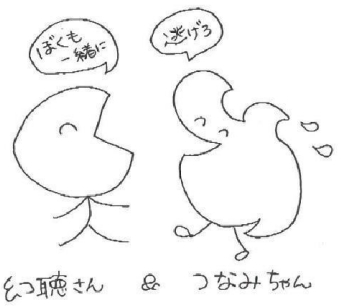
町民で避難した人は実は少なく、避難所にはべてるの人が多かった。警報が出てはいたが、町民の多くは大丈夫だろう逃げなかったらしい。べてるの人ばかりテレビの取材を受けていた。

避難が長時間になるにつれ、落ち着きがなくなったり、急に倒れたり、寝たりする人がいた。町民は途中で帰っていく人が多かった。一方、4時台に 40cm、5時台にも 70cm の津波が観測され、「ここで帰って津波に呑まれては、元も子もない」と思った。長時間になり、どのタイミングで帰宅したらよいか迷った。最終的には、役場からの避難解除と、べてるスタッフからもう帰ってよいというとの連絡で、べてるの仲間は帰った。

災害の時は孤立が最も危険

「元祖べてる」に入居していた仲間の場合、標高 10m の場所に住む自分たちは逃げるべきかどうかを迷ったそうだ。位置的には大丈夫だが精神的に不安になり、逃げた人が何人かいた。そのうち誰もいなくなって、取り残された入居者Hさんは「俺はどうしたらよいのか」と不安になった。本人は「ここなら大丈夫だから」と判断して残ったのだが、気持ちの面では「やっぱり逃げればよかったのか」と後から感じたという。当事者スタッフの秋山里子さんは「一人きりだと不安や緊張を処理するのが難しい仲間もいる。孤立して待つよりも、一緒に避難して支え合った方がよい場合もある」と話す。「避難場所で大勢と過ごす時間は緊張感も強くなり、工夫が必要。仲間がいても、緊張から端っこで縮こまっていた」とも。幸い、避難体験がきっかけで調子を崩した仲間はいなかった。

チリ沖地震のちょうど一週間前に、べてるでは避難訓練を実施していたのがよかった。練習通りに、自分がどこに逃げるというのも把握していたのでスムーズにいった。津波が来るまでに時間があったので落ち着いてできたのはよかった。



要援護者が災害支援のエキスパートになる

国立障害者リハビリテーションセンター研究所特別研究員の河村宏先生に話をうかがった。

べてるでは、マニュアルで確認し、実際に避難訓練を繰り返し実施してきた。自閉症の人たちが使っているソーシャルストーリー、パワーカードという技法を応用し、マルチメディアの技術を組み合わせた。そして隣近所とつながる、自治会や浦河町と結び合う。自治会との交流を求めた。

べてるでは、要援護者が最も心配なことを分析し、それを解決するにはどうしたらよいかという取り組みを進めたところ、町で一番の津波防災の物知りになった。

こんなエピソードがある。避難訓練の交通規制のお礼で警察を訪ねたところ、交通課長から思いがけず「熱心でびっくりした」と言われた。べてるの人が車いすの人をカバーしながら、避難所へ黙々と避難する姿を見て驚いたのだ。ふだん 110 番や 119 番のお世話になることが多い彼らだが、「見直した」と言われた。夜の避難訓練をやらなければと思っていたものの、警察としても町としても、これまでできなかった。

発災時は皆どこへ逃げればいいか右往左往するもの。べてるの人たちは塊（かたまり）で訓練をしてくれるので、町民にとってはどう逃げたらよいかという模範になった。交通課長からは「町民が遠くからみてルートが分かるから、ぜひ赤い誘導灯を持ってやってほしい」と期待された。

要援護者は、ほっとかれれば要援護者。だけど、自分たちの心配を活かして、こういう場合はどうしようと、寒い北海道の夜でも避難訓練をやってのける力になる。誰もやったことがないことをやり、定着させたのが、べてるのすごいところ。困難を抱えているからこそ、対策を理解し訓練をすれば安全になる、と確信させられる。要援護者は要援護者ではなく、その道のエキスパートになる。障害や病気の人は、それぞれの心配や苦労がある。

それぞれのケースについて、どうしたらよいか、それを活かして、応援して、最良の対処の仕方を一緒に見つけ出していくことによって、要援護者は減っていく。当初は、自分だけで避難することが目標だったが、４分で避難するところ３分で避難できたら、残りの１分で、隣近所にいっしょに逃げようと声をかけることができる。

要援護者が自分たちで勉強し、訓練することでエキスパートになる。周りの人たちに避難しようと呼びかけたり、手伝う力になる。べてるはそういうことを示してくれた。

●印：住居および活動拠点

本稿は１０月12～13日の訪問時のヒアリングをもとに執筆しました。長時間のインタビューにお付き合いいただいたべてるの家当事者スタッフの秋山里子さん、メンバーの吉田めぐみさんはじめ、池松麻穂さん、下野勉さん、井上健さん等々大勢のべてるメンバー、スタッフにお世話になりました。

また浦河町企画課長浅野浩嗣さん、同保健福祉課高齢化対策係長愛下延幸さん、浦河町社会福祉協議会事務局長早坂誠さんにも貴重な時間を頂戴しましたこと、併せて感謝します。

なお、河村宏先生の話は、12 月 1 日のＡＪＵ自立の家主催「災害時要援護者避難支援セミナー」での講演を再構成いたしました。